青森市埋蔵文化財発掘調査報告書　第59集

市　内　遺　跡

発掘調査報告書

平成12年度

青　森　市　教　育　委　員　会

序

青森市は、豊かな自然の中で培われてきた貴重な文化遺産が数多く所在しており、日本を代表する巨大集落跡として特別史跡に指定された三内丸山遺跡や、縄文人の精神生活に迫ることのできる環状列石を主体とする小牧野遺跡などもその中のひとつであります。

このように、先人たちが残してくれた多数の貴重な文化遺産が所在している本市でありますが、一方では、豊かで住みよいまちづくりをめざした、大型プロジェクト開発や地域開発等が市内のいたるところで行われている状況にあります。

当委員会では、これらの各種開発事業との円滑な調整を図りながら遺跡の保護を推進するために、平成2年度から本格的に埋蔵文化財保護行政を進め、平成12年度には更にきめこまやかな保護行政を推進するため、文化財課を新設したところであります。

本書は、平成12年度に実施した市内遺跡発掘調査結果をまとめたものであり、本市における埋蔵文化財の保護と歴史的解明の一役を果たすことができれば幸いに存じます。

最後に、発掘調査や整理作業を実施するにあたり文化庁、県文化課、さらには各関係者の多大なるご教示、ご協力に対し深く感謝の意を表します。

平成13年3月

青森市教育委員会

教育長　池　田　　敬

例　　言

1. 本書は、国と県の補助金交付を受けて、平成12年度に実施した青森市内遺跡発掘調査事業の調査報告書であり、分布調査ならびに試掘調査による調査成果を収録してある。
2. 本書の執筆・編集は青森市教育委員会が行い、木村淳一、児玉大成、設楽政健が担当した。執筆・作成分担については第Ⅱ・Ⅲ章は各調査担当がおこない文責を記した。それ以外の部分ならびに編集を木村が担当した。
3. 本書で用いる用語のうち、試掘調査という用語については、遺跡の内容・分布状況を確認する試掘調査と、周知の遺跡の性格・範囲を確認する確認調査を包括して取扱っている。当委員会の埋蔵文化財に対する取扱いはこれまで分布調査・試掘調査・本調査（発掘調査）3段階での取扱いできたが、多種多様な調査事例が今後増えるものと予想され、最終的には分布調査・試掘調査・範囲確認調査・本調査の4段階での取扱いが必要となるものと考えられる。現時点で過渡期の状況で、その取扱い方法等は内部で検討を重ねている最中であるため、本書では従前の取扱いのまま提示した。
4. 挿図の縮尺は、第Ⅱ章の位置図のみ国土地理院発行の2万5千分の1の地図を等倍で利用し、真北を上辺に統一した。それ以外の図についてはスケールによって示し、方位は磁北で示した。また、掲載遺物についての縮尺は1／3を基本に一部の図版で1／2で取扱っており、スケールで表現した。なお、写真図版の縮尺は統一を図っていない。
5. 土色の注記については、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄　1993）に準拠した。
6. 図版及び表番号は、各種別毎に通し番号とした。
7. 図版中で使用したスクリーントーン・表現方法は以下のとおりである。また、図版中で表現方法の異なる提示方法を用いる場合、凡例はその図版中に表記した。

8. 出土遺物及び記録図面・写真関係資料は、現在、青森市教育委員会で保管している。

目　　次

序
例言
目次

第Ⅰ章　事業実施の概要
第１節　調査目的…… 1
第２節　調査要項…… 1

第Ⅱ章　新規登録・範囲変更遺跡
第１節　新規登録遺跡
1　雲谷山吹（4）遺跡…… 5
2　雲谷山吹（5）遺跡…… 6
3　雲谷山吹（6）遺跡…… 7
4　雲谷山吹（7）遺跡…… 8
5　葛野（3）遺跡…… 9
6　雲谷山吹（8）遺跡……10
第２節　範囲変更遺跡
1　大浦遺跡 ……11
2　四ツ石遺跡 ……12

第Ⅲ章　試掘調査
第１節　大浦遺跡……13
第２節　安田（2）遺跡 ……21
第３節　雲谷地区：（仮称）青森市芸術創作工房建設予定地内試掘調査 ……22
第４節　大別内地区：八甲田霊園第２期造成工事予定地内試掘調査……25
第５節　近野遺跡……27

まとめ……30
引用参考文献……30
遺物観察表……31
写真図版
報告書抄録
既刊埋蔵文化財報告書一覧

第Ⅰ章　事業実施の概要

第1節　調査目的

近年、市内の各所において、道路網の整備事業や大規模施設の建設などの大規模開発事業が増加しており、併せて宅地開発や下水道整備事業等市民の身近な生活のなかで必要とされる各種開発行為が継続しており、破壊・消滅の危機に瀕している遺跡も増加している。貴重な埋蔵文化財を保護し、各種開発行為との円滑な調整を図るためには、周知の遺跡の現況・範囲・数の把握や今後開発が予想される地域における未発見の遺跡の新規登録などにより、市内に所在する遺跡に関する詳細な基礎資料を整備する必要がある。

以上の点を踏まえ、市内に所在する周知の遺跡について現況調査ならびに今後開発が予想される地域の分布調査を実施し、加えて開発行為に先立つ確認調査を実施するものである。

よって、この事業を標記の事業名で国と県の補助金を受け、実施するものである。

第2節　調査要項

1. 対象地域

① 分布調査

対象：市内全域

今年度は市内において、各開発事業が予定されている地域を重点地域とする。

② 試掘調査

対象：野内地区（大浦遺跡）・安田地区（安田（2）・近野遺跡）・雲谷地区・大別内地区

事業照会等による周知の遺跡の範囲内容確認ならびに遺跡空白地域における有無確認調査

2. 事業実施期間

平成12年4月1日～平成13年3月31日

3. 調査担当機関

青森市教育委員会生涯学習部文化財課

4. 調査体制

調査事務局

青森市教育委員会

教　育　長　池田　敬

生涯学習部長　中西秀吉

生涯学習部次長　三浦賢悟

生涯学習部参事
　兼文化財課長　　遠　藤　正　夫
文化財課長補佐　　蝦　名　淳　一
主　査　　堀　谷　久　子（庶　務　担　当）
主　事　　木　村　淳　一（調　査　担　当）
　〃　　児　玉　大　成（調　査　担　当）
　〃　　設　楽　政　健（調　査　担　当）

5. 調査指導機関　　文化庁
　　青森県教育庁文化課

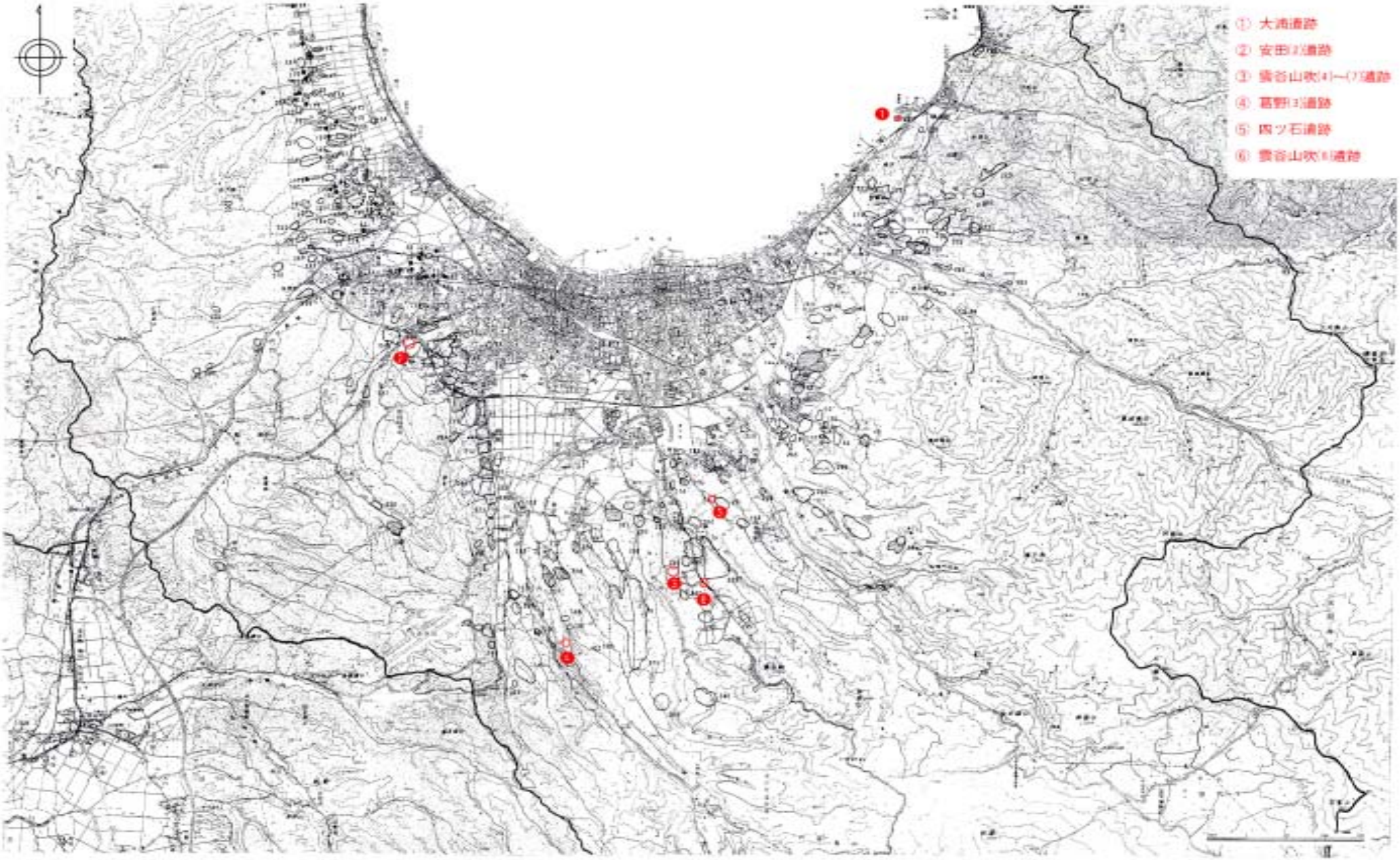
6. 調査方法

① 分布調査

市内全域を対象とし、特に開発が予想される地域を重点的に踏査することによって、周知の遺跡の現況・範囲・数などの把握、開発によって消滅・破壊の危機に瀕している周知の遺跡のリストアップ、未発見の遺跡の登録などを行い、市内に所在する遺跡に関する基礎資料を整備する。また、開発申請のあった地区の現地立ち会いや周辺の踏査、一般市民からの情報提供をもとに分布調査を行う。踏査の結果、新たに発見された遺跡は青森市遺跡台帳ならびに青森県遺跡台帳に登録される。また、現況・範囲などに変更があった遺跡は、その都度、台帳を訂正する。

② 試掘調査

事業照会があった開発予定地内に埋蔵文化財包蔵地が所在もしくは所在するおそれのある場合、試掘調査を実施し、遺跡の範囲・性格・密度等の内容を調査する。未発見遺跡の場合新たに台帳登録を行い、周知の遺跡についても範囲に変更があった場合には台帳を訂正する。



第１図　平成 12 年度調査対象遺跡一覧

第Ⅱ章　新規登録・範囲変更遺跡

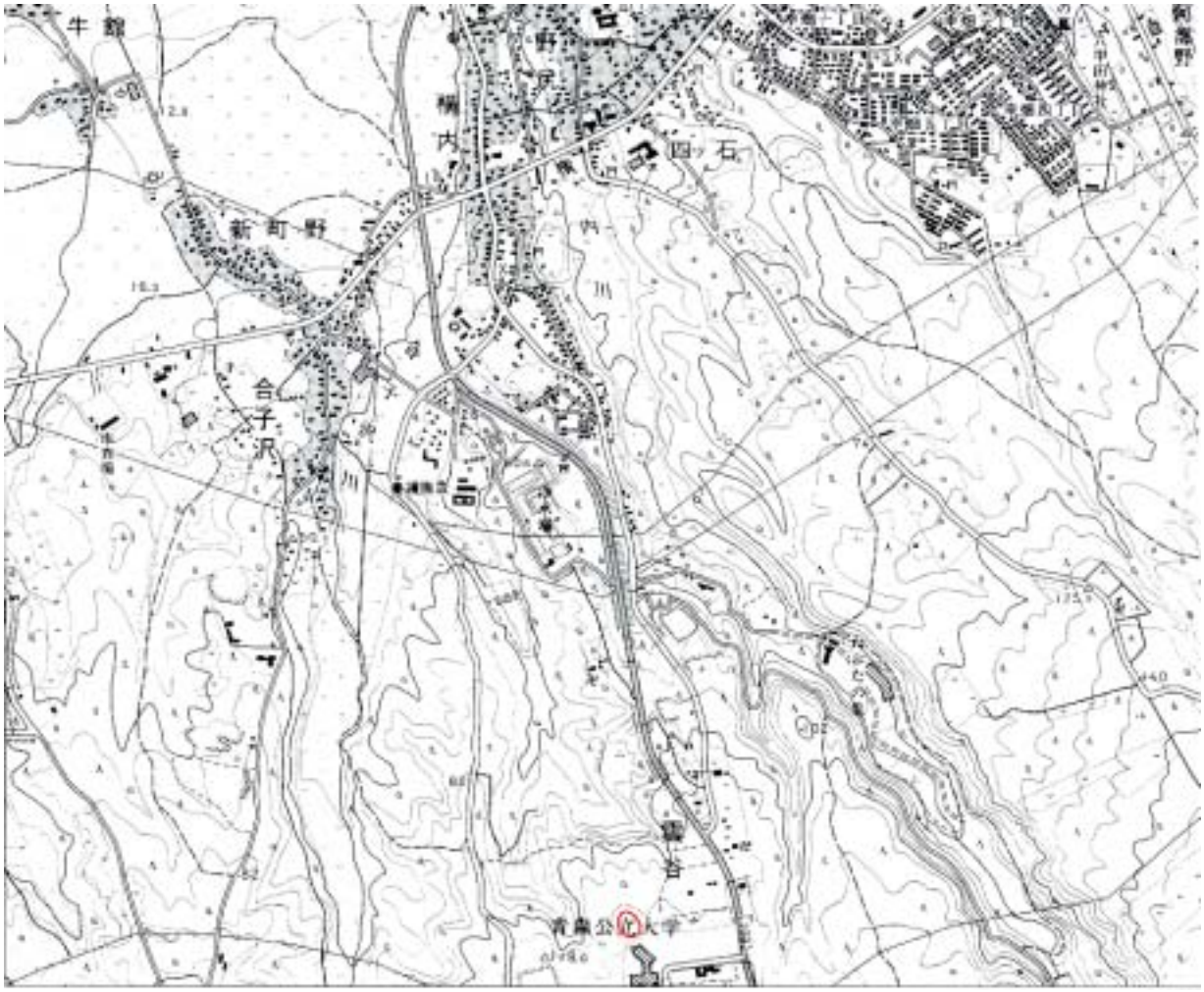
第１節　新規登録遺跡

遺　跡　名	雲谷山吹（４）遺跡	立　　地	丘陵
遺　跡　番　号	０１３０３	現　　況	山林
所　在　地	青森市合子沢字山崎153－1ほか	時　　代	縄文
種　　別	集落跡	遺　　物	縄文土器・石器

備　考

青森市（所管：企画調整課）が計画した（仮称）青森市芸術創作工房建設予定地内を対象とした試掘調査（平成12年7月24日～31日）により新規登録。試掘調査結果については本書第Ⅲ章第3節で報告。

開発予定者である青森市との協議において同様に新規登録をした雲谷山吹（5）～（7）遺跡を含めた工事対象地区について単費の非計上費により発掘調査を平成12年8月21日～10月14日までで実施した。発掘調査結果については次年度報告書作成・刊行予定。（木　村）



第２図　位置図

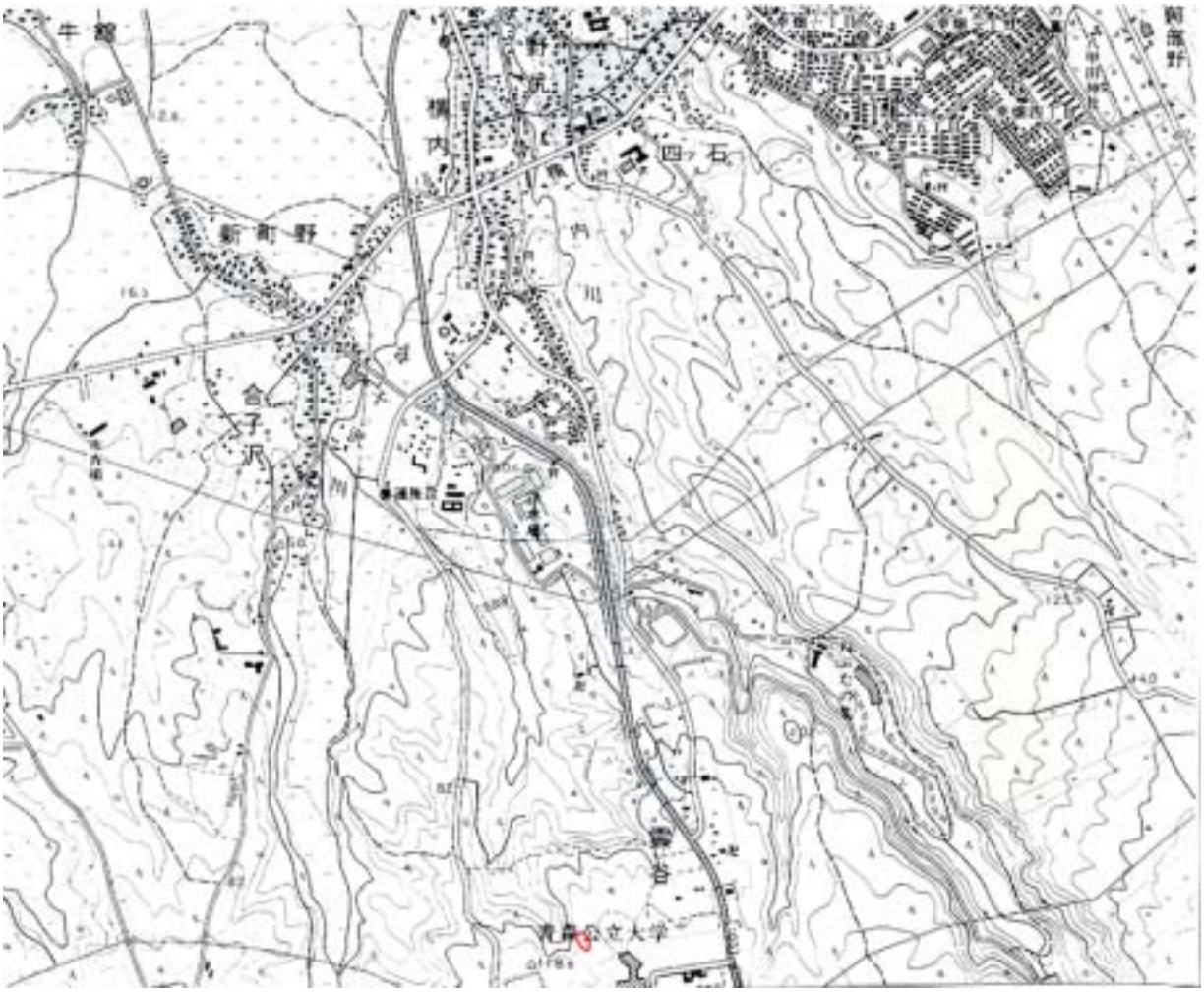
遺　跡　名	雲谷山吹（５）遺跡	立　　地	丘陵
遺　跡　番　号	０１３０４	現　　況	山林
所　在　地	青森市合子沢字山崎152－6	時　　代	縄文・平安
種　　別	集落跡	遺　　物	縄文土器・土師器

備　考

青森市（所管：企画調整課）が計画した（仮称）青森市芸術創作工房建設予定地内を対象とした試掘調査（平成12年7月24日～31日）により新規登録。試掘調査結果については本書第Ⅲ章第3節で報告。

開発予定者である青森市との協議において同様に新規登録をした雲谷山吹（4）・（6）・（7）遺跡を含めた工事対象地区について単費の非計上費により発掘調査を平成12年8月21日～10月14日までで実施した。発掘調査結果については次年度報告書作成・刊行予定。

（木　村）



第３図　位置図

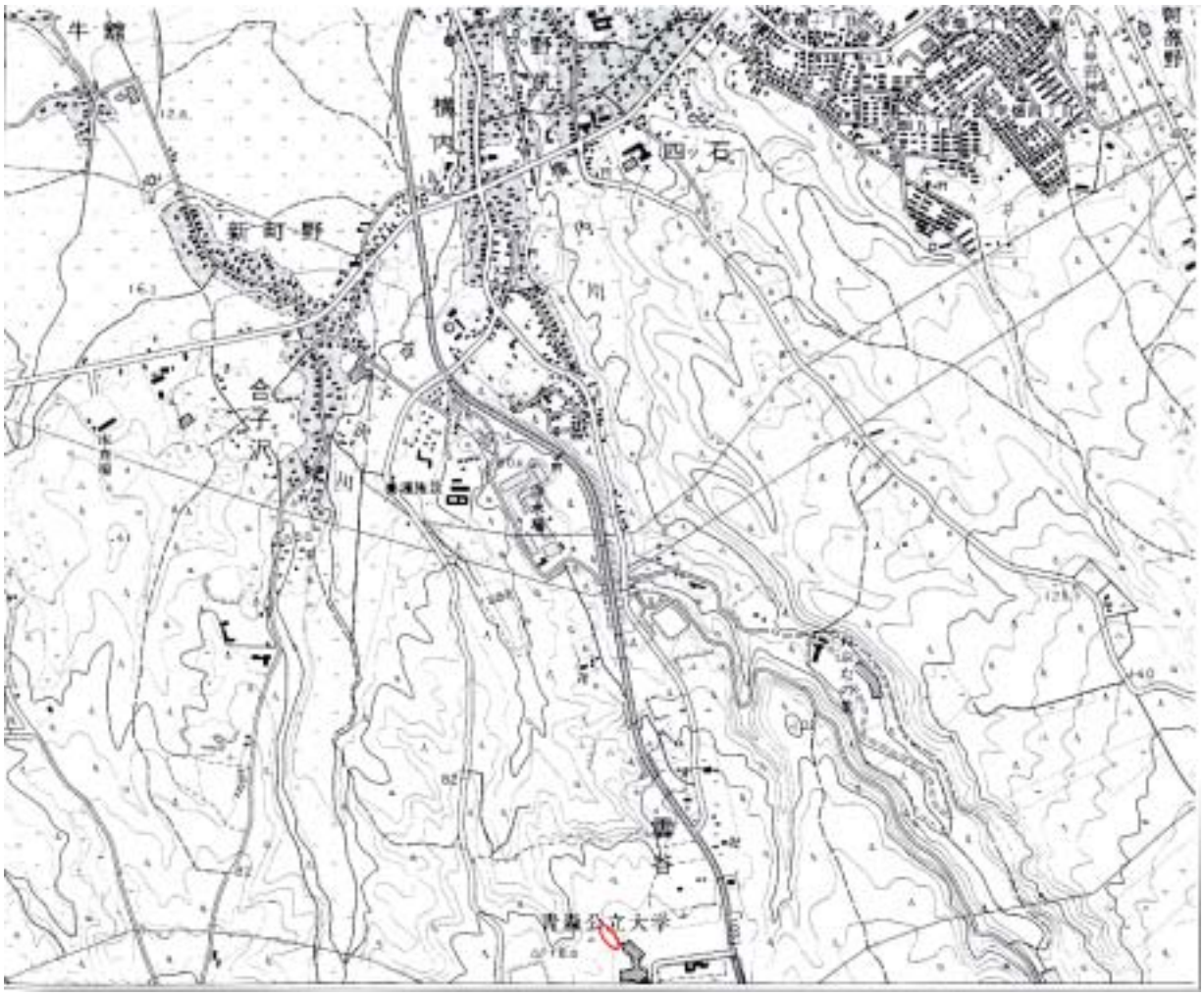
遺　跡　名	雲谷山吹（６）遺跡	立　　地	丘陵
遺　跡　番　号	０１３０５	現　　況	山林
所　在　地	青森市合子沢字山崎152－6	時　　代	縄文・平安
種　　別	集落跡	遺　　物	縄文土器・土師器・須恵器

備　考

青森市（所管：企画調整課）が計画した（仮称）青森市芸術創作工房建設予定地内を対象とした試掘調査（平成12年7月24日～31日）により新規登録。試掘調査結果については本書第Ⅲ章第3節で報告。

開発予定者である青森市との協議において同様に新規登録をした雲谷山吹（4）・（5）・（7）遺跡を含めた工事対象地区について単費の非計上費により発掘調査を平成12年8月21日～10月14日までで実施した。発掘調査結果については次年度報告書作成・刊行予定。

（木　村）



第４図　位置図

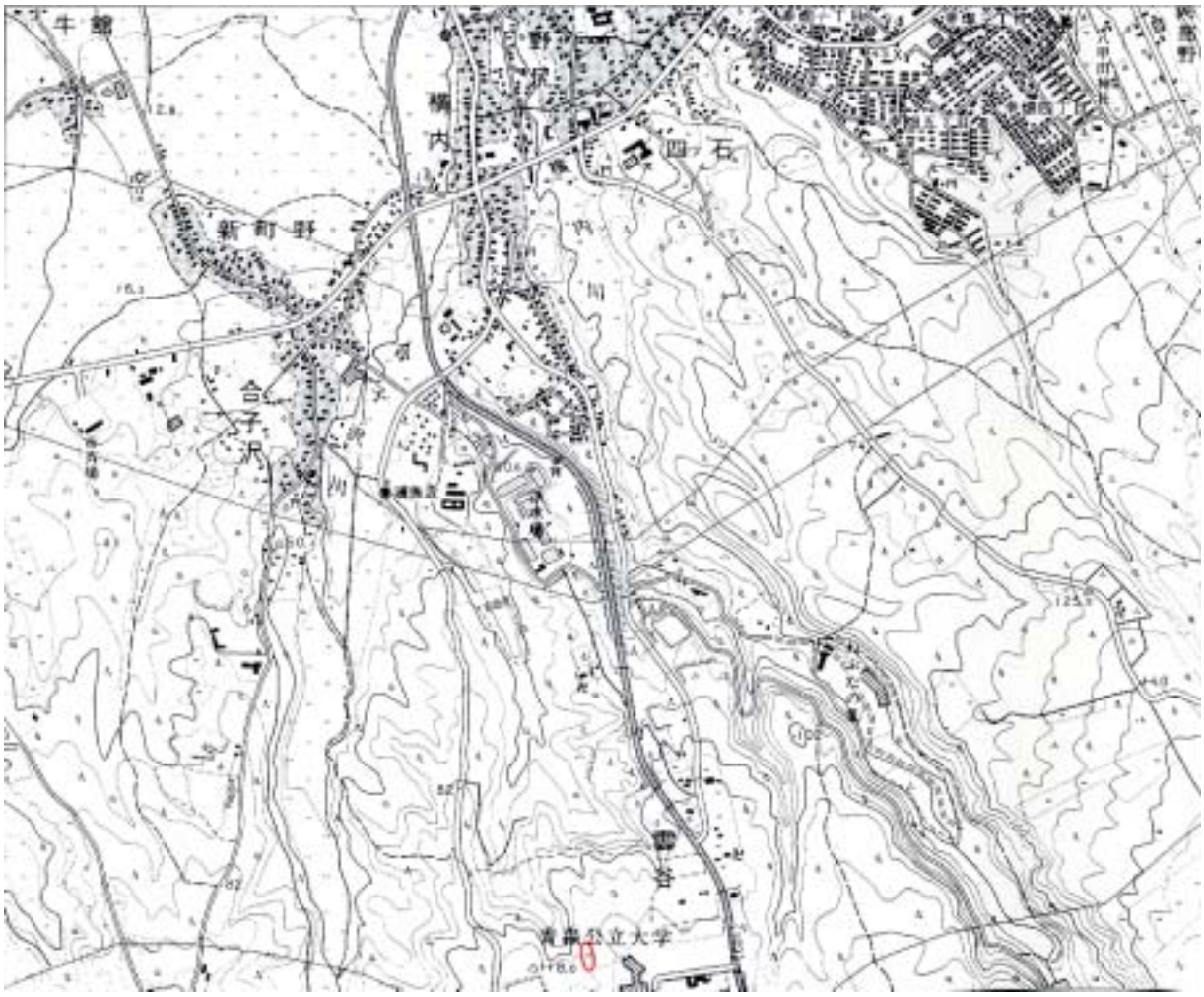
遺　跡　名	雲谷山吹（７）遺跡	立　　地	丘陵
遺　跡　番　号	０１３０６	現　　況	山林
所　在　地	青森市合子沢字山崎153－1ほか	時　　代	縄文・平安
種　　別	集落跡	遺　　物	縄文土器・土師器

備　考

青森市（所管：企画調整課）が計画した（仮称）青森市芸術創作工房建設予定地内を対象とした試掘調査（平成12年7月24日～31日）により新規登録。試掘調査結果については本書第Ⅲ章第3節で報告。

開発予定者である青森市との協議において同様に新規登録をした雲谷山吹（4）～（6）遺跡を含めた工事対象地区について単費の非計上費により発掘調査を平成12年8月21日～10月14日までで実施した。発掘調査結果については次年度報告書作成・刊行予定。

（木　村）



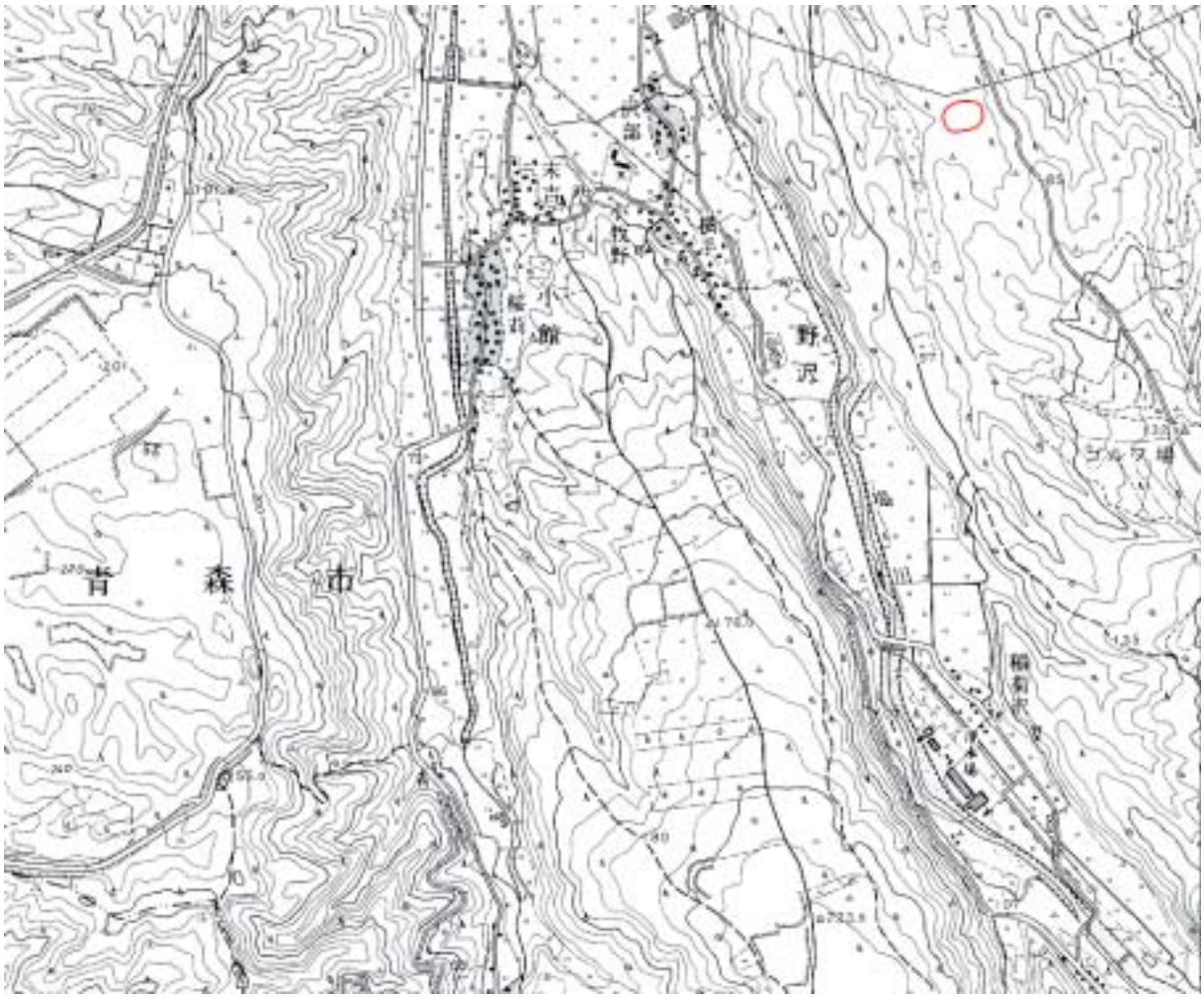
第５図　位置図

遺　跡　名	葛野（３）遺跡	立　　地	丘陵
遺　跡　番　号	０１３０８	現　　況	山林
所　在　地	青森市大別内字葛野116－2	時　　代	縄文・平安・中世
種　　別	集落跡	遺　　物	縄文土器・土師器・須恵器

備　考

青森市（所管：市民生活課）の八甲田霊園第2期造成工事に先立つ試掘調査（平成12年11月6日～10日）により新規登録。試掘調査結果については本書第Ⅲ章第4節で報告。

（設　楽）



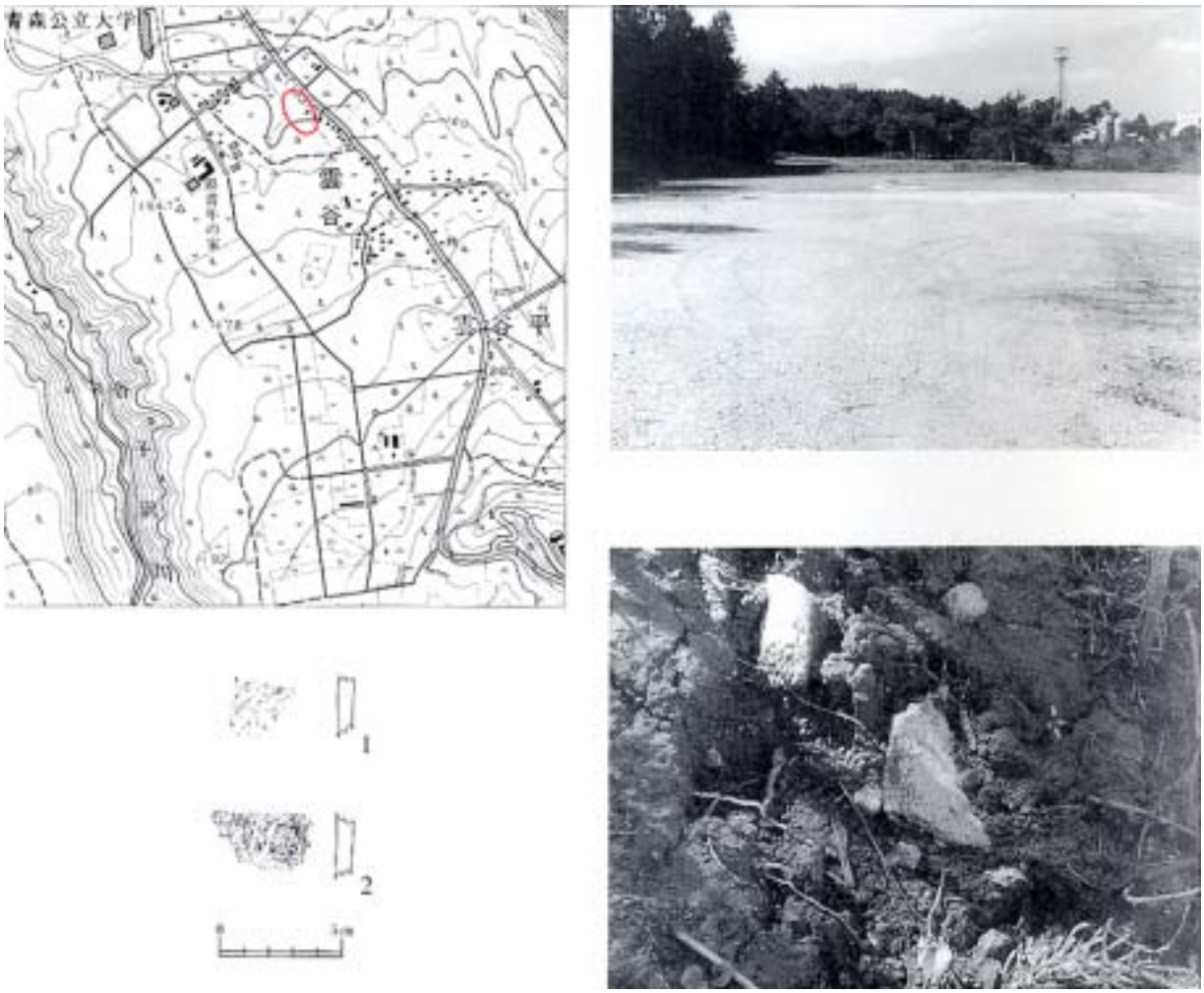
第６図　位置図

遺　跡　名	雲谷山吹（８）遺跡	立　　地	丘陵
遺　跡　番　号	０１３１０	現　　況	宅地・山林・原野（削平地）
所　在　地	青森市雲谷字山吹94－2ほか	時　　代	縄文
種　　別	散布地	遺　　物	縄文土器

備　考

分布調査時に切土された部分から縄文土器数片が露出。大部分が削平を受け詳細については不明の部分が多く、破壊されたものと考えられる。

（木　村）



第７図　位置図・現状写真・出土遺物

第２節　範囲変更遺跡

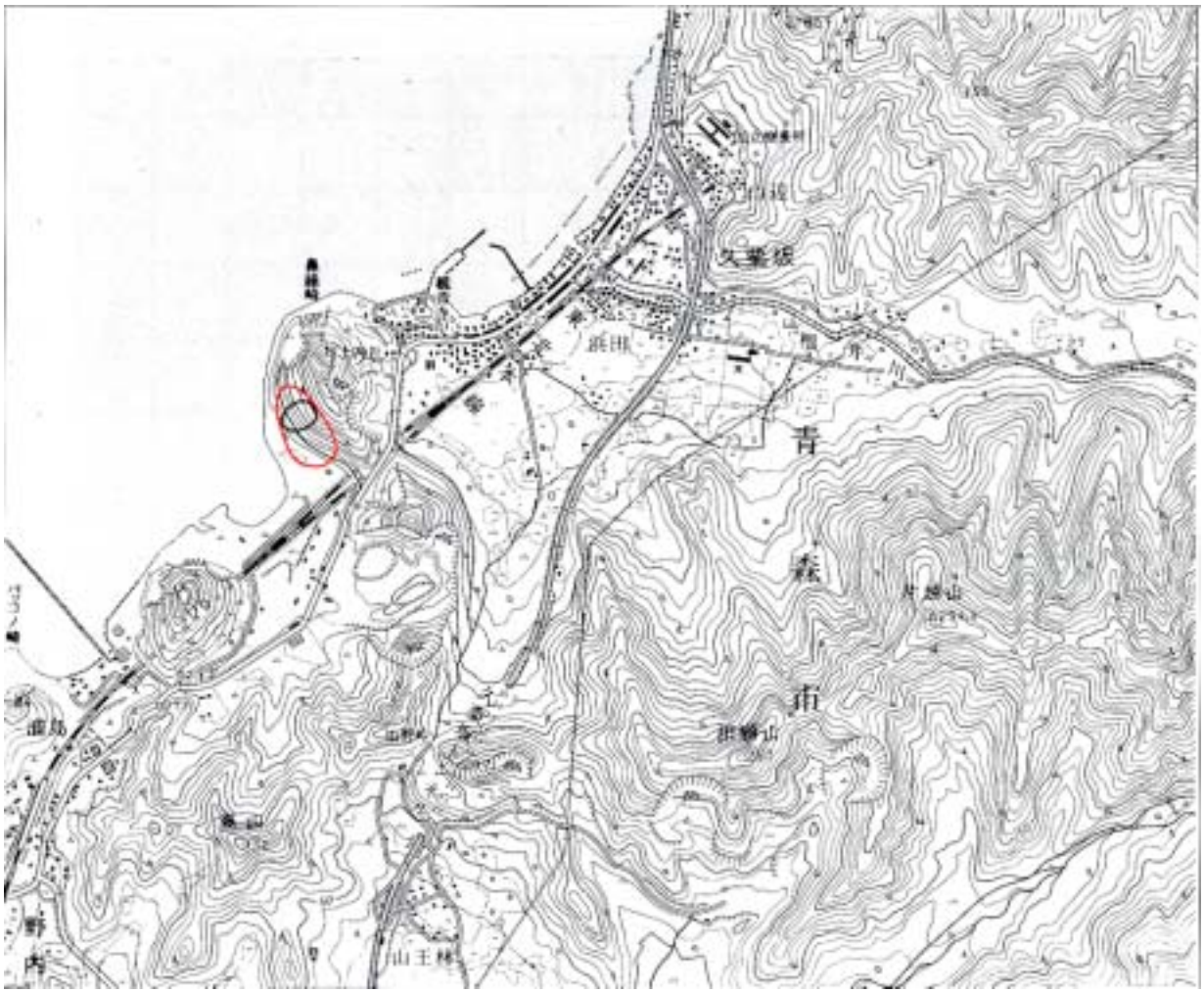
遺　跡　名	大浦遺跡	立　　地	海岸段丘
遺　跡　番　号	０１０６３	現　　況	山林・畑地
所　在　地	青森市野内字浦島246－1ほか	時　　代	縄文・平安
種　　別	散布地・製塩跡	遺　　物	縄文土器・須恵器・製塩土器

備　考

資材置場建設に係る試掘調査を平成12年5月22日～26日まで実施。調査の結果、遺跡範囲は拡張した。調査結果については第Ⅲ章第1節で報告。

調査結果を基に、今後の遺跡の取扱いについては開発予定者と協議中。

（木　村・児　玉）



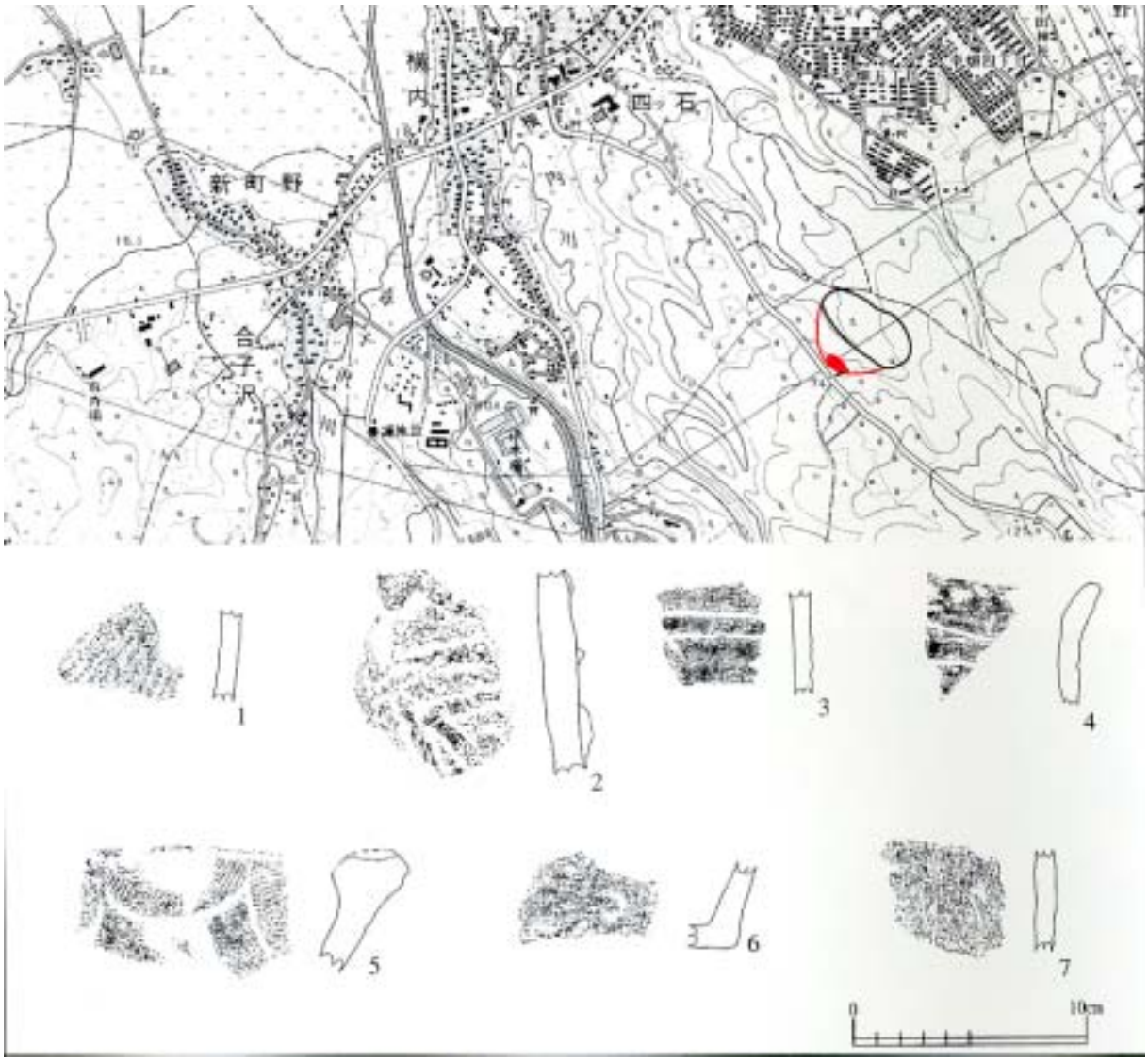
第８図　変更後遺跡範囲図

遺　跡　名	四ツ石遺跡	立　　地	丘陵
遺　跡　番　号	０１０２８	現　　況	菜園畑地・原野
所　在　地	青森市四ツ石字里見312ほか	時　　代	縄文・平安
種　　別	集落跡	遺　　物	縄文土器・土師器

備　考

市民からの通報により判明。調査時点で遺跡に隣接する菜園分譲地上に多量の土器が散布しており、切土が発生していた。踏査の結果、遺跡範囲は拡張した。開発者には開発を拡充する際に協議を依頼。

（木　村）



第９図　変更後遺跡範囲図・採集遺物

第Ⅲ章　試掘調査

第１節　大浦遺跡

調査対象等

1. 調　査　地：青森市野内字浦島 246 － 1、246 － 2、248、249、250、256、257
2. 開発行為：資材置場建設予定
3. 調査期間：平成 21 年 5 月 22 日～ 26 日

調査に至る経過

大浦遺跡は古くから考古遺物蒐集家によりその存在が知られており、1968年に一部発掘調査が実施されている。当委員会でも1971年に一部の地区について発掘調査を実施しており、縄文時代晩期の貝塚跡と平安時代の製塩跡を検出している。当委員会の調査結果について概要的な報告書が同年に刊行されているが、その報告書内で報告されている遺跡範囲と実際台帳に登録されている遺跡範囲とに違いが生じた状況のまま現在に至っていた。今回建設会社による大浦遺跡周辺部の土地を資材置場とする開発行為に先立ち、原因者の理解のもと、開発予定地ならびに周辺部を試掘調査し、遺跡の内容・包蔵状況を確認する調査を実施した。

調査方法

資材置場建設予定地は現況で砂浜ならびに畑地の部分に対して切土を行う開発予定であったため、畑地部分を中心に土層堆積状況・遺物包含状況・遺構有無確認を主眼に行った。対象地区の一部については用地が未買収の地区もあり、その地点を避け１×2ｍのトレンチを 12 箇所、併せて任意に１地点２×3.5ｍのトレンチを設定し、人力による掘削をおこなった。それ以外に既に廃材等により盛土されていた部分３箇所（調査開始時点では４箇所であったが一部合併）111㎡を重機による掘削で確認した。

北側の状況について前述の未買収の問題があったため調査地が限られ、１地点３×3.6ｍのトレンチを設定し調査にあたった。

総調査面積は約 146㎡である。

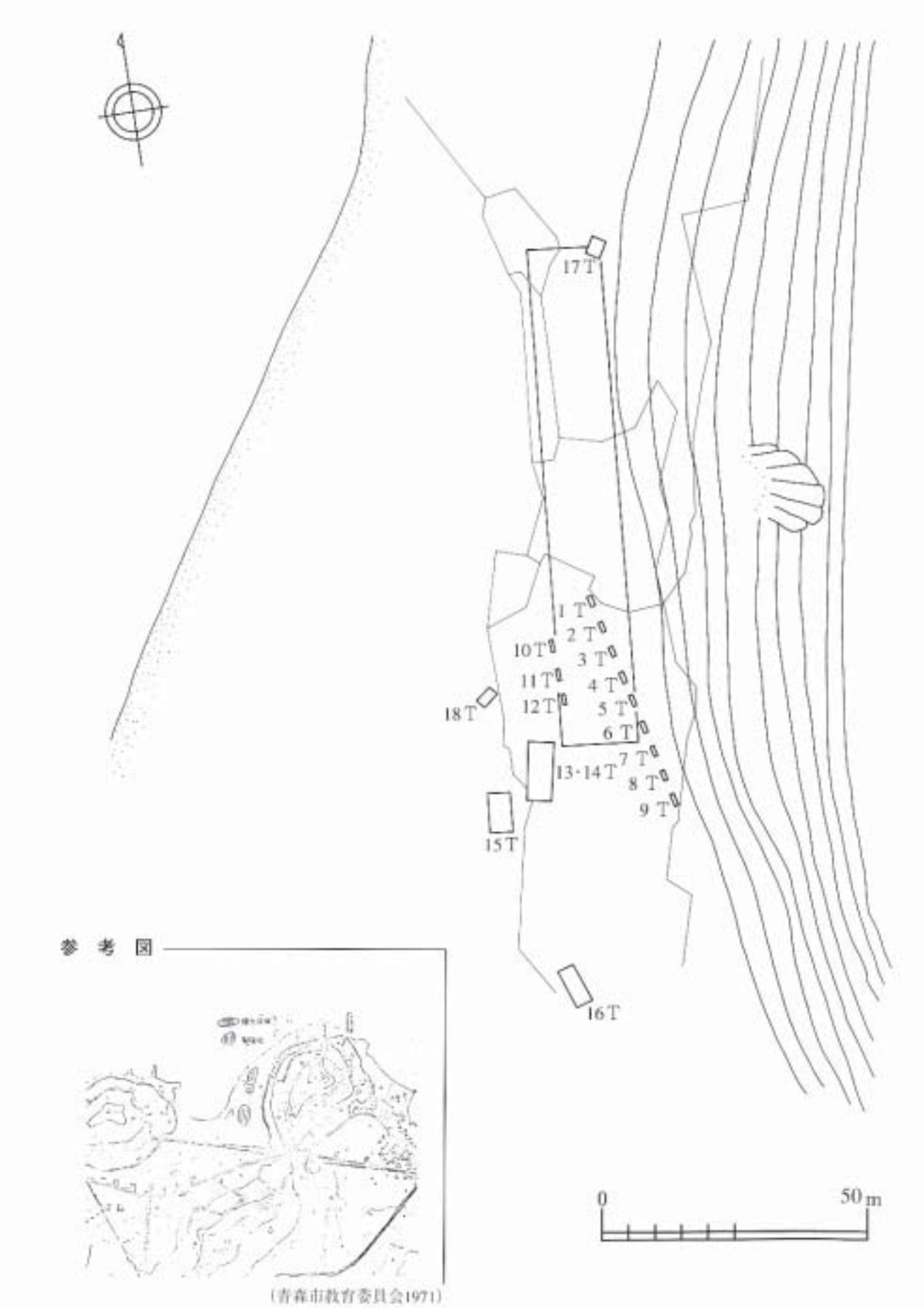
トレンチの呼称は調査着手順とし、遺物取り上げについてもトレンチ単位で取扱った。

調査結果

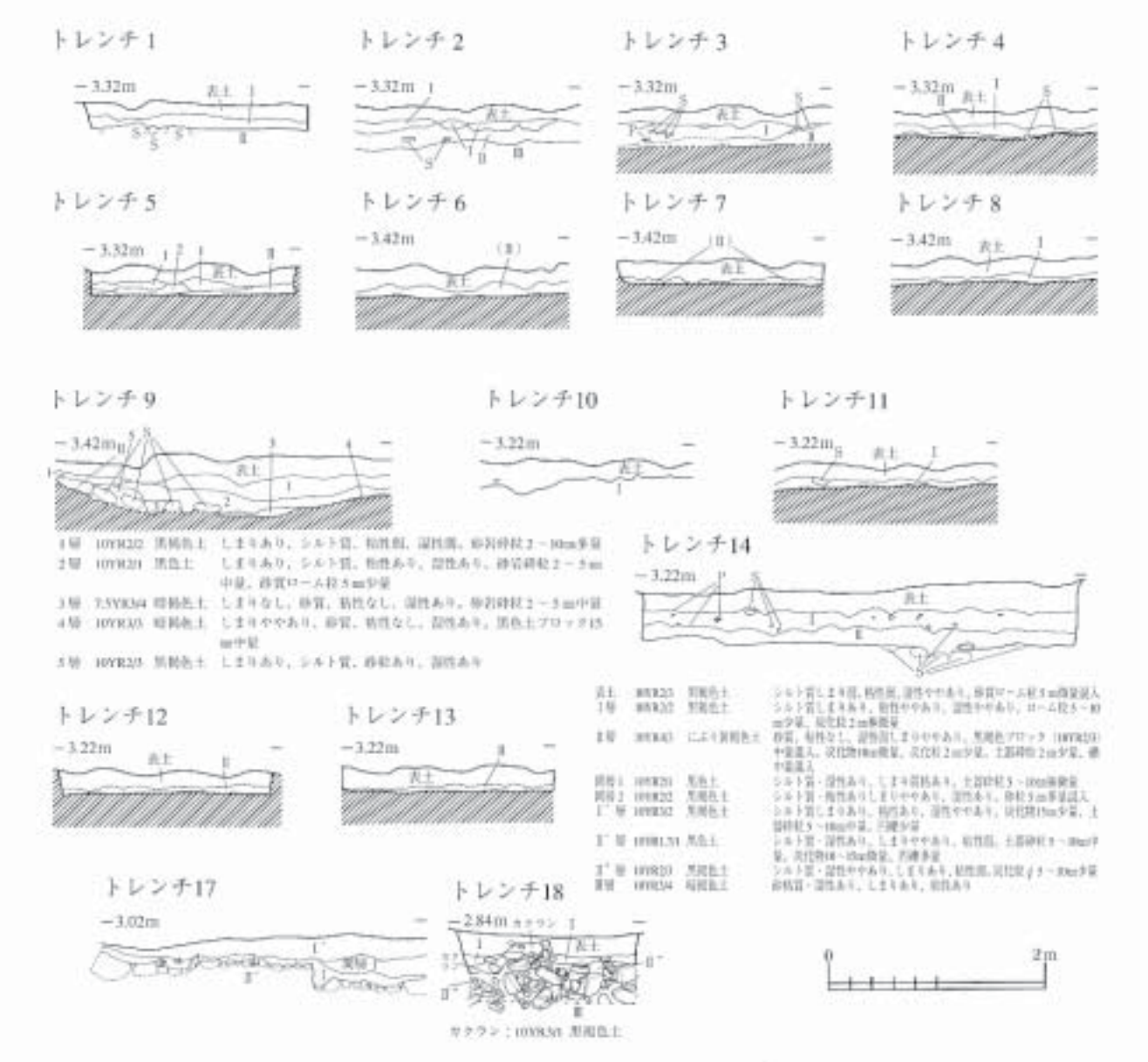
調査結果の記述に際して土層堆積状況・出土遺物の包含状況の記述を先に提示し、出土遺物については時代毎に項目を分け記述することにする。

堆積土

18 トレンチのうち、トレンチ１～14 までは休耕地であるが畑地として利用されていた土地であり、一部耕作による影響が見られる。また、トレンチ 13・14 の一部ではトラクターによる掘削痕が地山面に残存していることから土層そのものは転地換えされた可能性が強い傾向にあるが、自然礫の包含する漸移層が残存している箇所も見られる。遺物の包含は第Ⅰ層黒褐色土中を主体に認められ



第10図　参考図ならびにトレンチ配置図



第 11 図　土層堆積図

た。トレンチ９は境界溝によって掘削を受けている部分にあたり、下層に自然礫の包含層が確認できるが伏流のため土層堆積状況が他と異なり湿り気のある土質の堆積が見られた。トレンチ15は廃材ならびに自然礫の包含する土層堆積が見られ、前述の転地返しの際に大きく破壊された地点であると考えられ、また境界溝を越えたトレンチ 16 には廃材等の盛土層が 2m ほど堆積しており大幅に破壊されたものと考えられる。付近に備蓄用の大型タンクが存在していることから開発当時の時点でかなり地盤の改変がなされた可能性が高いものと考えられる。トレンチ18は、砕片化した縄文時代晩期の土器片ならびに製塩土器片等が混在した形でⅠ層に包含した状況であった。地点を換えたトレンチ17は堆積状況が大きく異なり、畑地として利用されていた当時の影響層である表土直下に砕片した縄文時代晩期の土器を主体的に包含するⅠ層が確認され、その直下には多量の自然礫と供に晩期ならびに中期の土器片が包含する包含層Ⅱ″層が約40～45cm 堆積している。貝層の検出はなく、獣骨が１点出土した。その直下についても暗褐色土層の自然礫を包含する土層が続くが遺物の

包含が認められず、人力による掘削が困難を極めたため調査を打ち切った。　（木　村）

出土遺物

縄文時代～弥生時代（第12図）

遺物は、トレンチ17からの出土が大半で、ほとんどが土器片であった。土器は、時期別に以下の5群に区分される。また、石器は、すり石1点のみの出土である（第12図43、32頁表）。

第Ⅰ群土器　縄文時代前期に属するもの
第Ⅱ群土器　縄文時代中期に属するもの
第Ⅲ群土器　縄文時代後期に属するもの
第Ⅳ群土器　縄文時代晩期に属するもの
第Ⅴ群土器　弥生時代に属するもの

第Ⅰ群土器　縄文時代前期に属するもの（1）

円筒下層d式土器に相当する深鉢形土器で、口縁部には4条の撚糸圧痕文からなる文様帯、その直下には結節するLR羽状縄文からなる文様帯、さらにその直下には縦位方向のRL縄文が施されている。

第Ⅱ群土器　縄文時代中期に属するもの（2～5）

2～4は、円筒上層a式土器に相当する深鉢形土器で、2には湾曲する頸部に、口縁部と胴部を連絡する橋状把手が貼付されており、頸部中央には横位の縄文圧痕が施されている。3・4は同一個体で山形口縁の縁辺部などに撚糸圧痕の隆帯が施されている。5は、円筒上層c～d式土器に相当する深鉢形土器で、口端には波状の隆帯、口縁にはドーナツ状の隆帯、胴部にはLR縄文が施されている。また、ドーナツ状の隆帯が位置する内面には、その中心と対置するように深さ5㎜弱の指頭圧痕が施されている。

第Ⅲ群土器　縄文時代後期に属するもの（6～8）

いずれも同一個体で、十腰内Ⅰ式土器に相当する土器である。口縁が波状を呈する深鉢形土器で、胴部に斜位や楕円形の沈線文が施されている。

第Ⅳ群土器　縄文時代晩期に属するもの（9～41）

大洞C_2～A式土器に相当する土器である　器種や器形、文様により、以下の11類に分類される。

1類　連続する小波状口縁をもつ深鉢形土器で無文のもの（9～19）

本類は、第Ⅳ群土器の中で最も出土量が多く、土器製作（成形）時の輪積みの痕跡を残すものが目立つ。9～17は、土器外面にミガキがほとんど施されないもので、9～14には輪積痕もみられる。18・19は、土器外面にやや丁寧なミガキが施され、輪積痕も磨消されている。また、本類の土器内面は、ほとんどがナデやミガキにより輪積痕が磨消されており、外面に輪積痕が残り内面には残らないという土器が目立った。また、9・10は、製作時に、一度口縁部を小波状に成形しておきながら、さらにその上にもう一段粘土紐を積み上げ、あらためて小波状口縁を作り出している痕跡がみられ

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
0
10cm

第 12 図　出土遺物 1

る。15には、補修孔もみられる。

2類　連続する小波状口縁をもつ深鉢形土器で縄文が施されるもの（20）
地文をLR縄文とし、施文後に口縁部に2条の平行沈線文が施されている。

3類　連続する小波状口縁をもつ深鉢形土器で条痕文が施されるもの（21・22）
　いずれも、口縁部が外反、頚部が内傾するもので、頚部に3条の平行沈線文、胴部に縦位方向の条痕文が施されている。

4類　口縁の一部に突起をもつ深鉢形土器で条痕文が施されるもの（23）
　口縁の突起はそれほど大きくはなく、欠損しているがB状を呈する突起と思われる。口縁直下には3条の平行沈線文が施され、胴部に縦位方向の条痕文が施されている。

5類　口縁が平坦な深鉢形土器で条痕文が施されるもの（24～27）
　24は、口縁から胴部に縦位方向の条痕文が施されている。25～27は、口縁直下に2条の平行沈線文が施され、胴部に縦位方向の条痕文が施されている。

6類　口縁が欠損する深鉢形土器で無文のもの（28・29）
　28は、両面ともやや丁寧なミガキが施され、輪積痕は磨消されている。補修孔もみられる。29は、両面ともやや雑なミガキが施され、外面には輪積痕が明瞭に残っている。また、外面には部分的に暗赤褐色を呈する二次被熱痕が観察されるが、内面にはみられない。

7類　口縁が欠損する深鉢形土器で縄文が施されるもの（30～32）
　30は、口縁付近に2条の平行沈線文と胴部にLR縄文が施されている。31・32は、いずれもRL縄文が施されている。

8類　口縁が欠損する深鉢形土器で条痕文が施されるもの（33～35）
　いずれも胴部に縦位方向の条痕文が施されている。33の口縁直下には3条の平行沈線文が施されている。

9類　頚部に数条の沈線が施される鉢形土器（36～39）
　いずれも頚部が内傾するもので3条の平行沈線文が施され、36・38・39の沈線直下には粘土粒が貼付されている。また、胴部には、36が縦位方向の条痕文、37・39がRL縄文が施されている。

10類　鉢形土器の大型突起（49）
　口縁部に加飾される大型の突起である。形状は山形でその頂部には前後に突出する舟形の装飾も施されている。文様は、両面に三角形のスリットが施されている。

11類　頚部に数条の沈線が施される壷形土器（41）

口縁が外反し、胴部が球状を呈する。頚部に3条の平行沈線文が施され、胴部が無文の土器である。胎土には海綿骨針が含まれている。

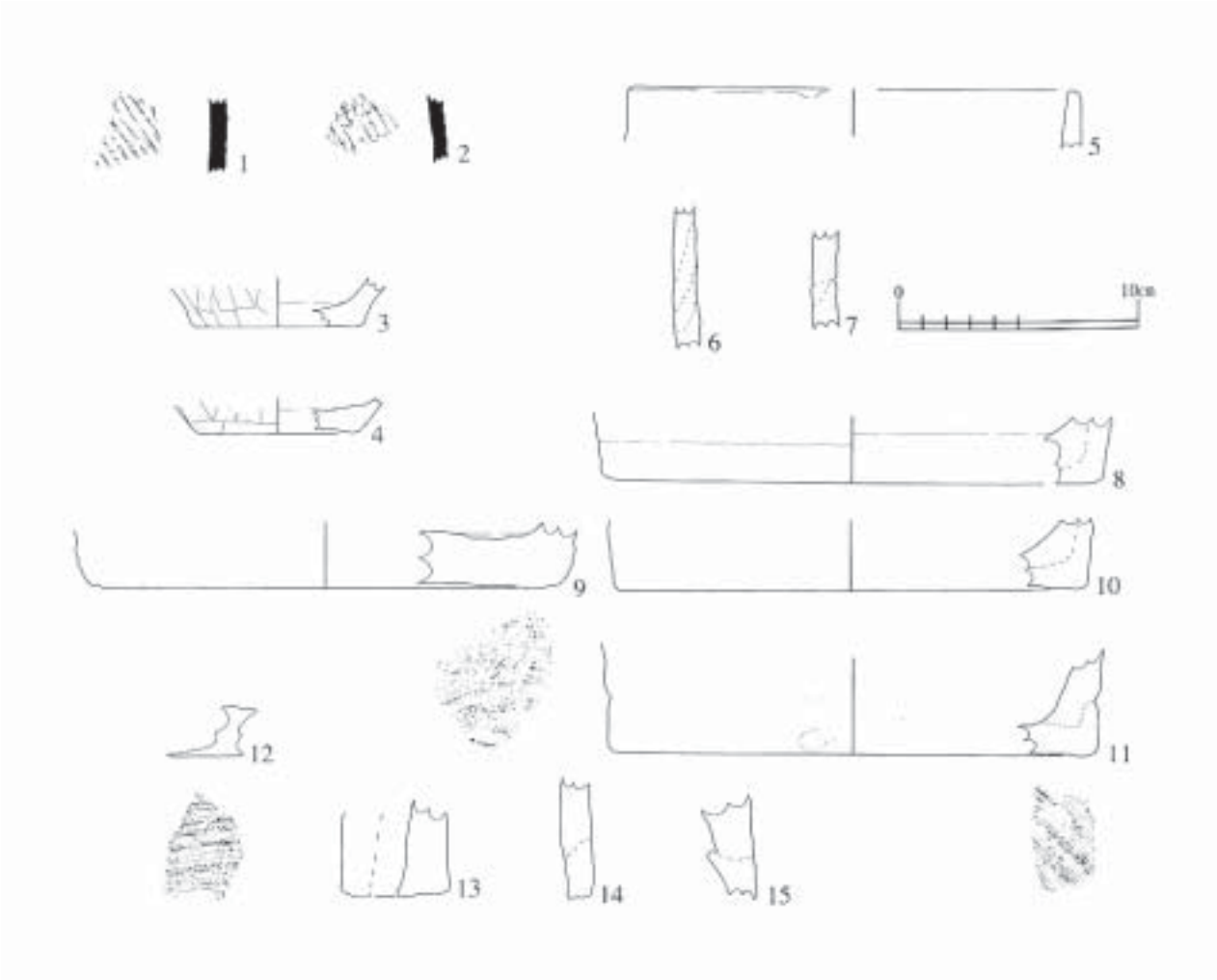
第Ⅴ群土器　弥生時代に属するもの（42）

念仏間式土器に相当する甕形土器である。胴部には、数条の平行沈線文とその間に波状の沈線文が施されている。（児　玉）

平安時代（第13図）

砕片での出土が主体であり、図示可能な資料についてもかなり限られる内容となった。

出土位置はトレンチ18を主体としており、2の須恵器のみトレンチ5からの出土であった。トレンチ18については、1971年調査の製塩跡と想定される地点に近接した位置であるため関連性が考えられる。1・2は須恵器胴部片でいずれも色調が灰色（5Y6／1）を主体とし、1の外面が若干黒味がかった灰色を呈する。いずれの資料も鋭利な剥離痕や摩滅痕が見られ、耕作等による二次的影響が考えられる資料である。胎土中に海綿骨針が見られ、断面等の特徴から五所川原産であることが考えられる。土師器については長甕の出土はなく、小甕の底部片のみ2点の出土で、3は底径6.6㎝を測る。砂粒の混入が少なく、粘りの強い胎で外面の器面の色調は灰褐色（7.5YR5／2）を呈し、内面はにぶい橙色（7.5YR6／4）を呈する。4は摩滅の度合いが激しく砂礫の混入が3に比べやや多く、外面の器面の色調はにぶい橙色（7.5YR6／3）、内面の色調はにぶい黄橙色（10YR6／2）を呈する。底面は3と異なり網状脈の木葉痕である。5～13は製塩土器であるが、いずれも砕片化した資料で全体形のわかる資料は出土していない。底部付近が極めて厚手の粘土紐を積み重ねた作りをしており、体部～口縁部にかけての器壁は7～10㎜を測る。ただし、胎土の特徴が浮石質の鉱物が混入するボソボソした質感を持つタイプ（8・9・12）と粘り気のある硬質な質感を有するタイプ（6・10・11）とその中間に位置するやや粘りのあるタイプ（5・7）の3系列が存在し、掲載外の他の資料も含めるとボソボソした質感を有するタイプが主体を占めるが、胎土のバリエーションが存在した可能性が考えられる。器面の色調を観察すると外面が橙色・浅黄橙色を呈すのに対して断面の外面寄り部分～内面にかけてにぶい赤褐色～浅赤橙色を呈す資料が多く、煮沸が揮発性を増すまでかなりの温度までのぼったことを示す状況である。体部資料の6は外面が左上がりの輪積痕が観察され、正位において製品を作りあげたと仮定すると右回りに巻き上げて成形しているようである。輪積痕について内面側は撫で消しが顕著であるが、外面側は撫で消されていない傾向にあり、破損状況が輪積の目に沿って破損しているケースが多く観察される。底部資料のうち底径幅の復元径は19.6㎝～21㎝を測り、ほぼ類似した規格にまとまるが凝集性の検証について資料数の絶対量が不足しているため明言をさけたい。昨年度当委員会で調査を実施した内真部（9）遺跡や平内町大沢遺跡の調査で出土した製塩土器の底部の接合方法（板状の底部を作り輪積みで積み重ねる手法）とは若干異なる接合方法で、受口状の底部を作りその内面に粘土紐を積み重ねるような製作手法を用いている。底面は柾目状板痕が観察される。土製支脚については13～15で棒状支脚・円筒状支脚いずれも出土しているが、小破片であるため、詳細については不明である。（木　村）



第 13 図　出土遺物 2

第 2 節　安田（2）遺跡

調査対象等

1. 調　査　地：青森市細越字栄山 75 ~264 ほか（安田（2）遺跡地内）
2. 開発行為：鉄塔建替工事
3. 調査期間：平成 12 年 5 月 29 日～ 30 日

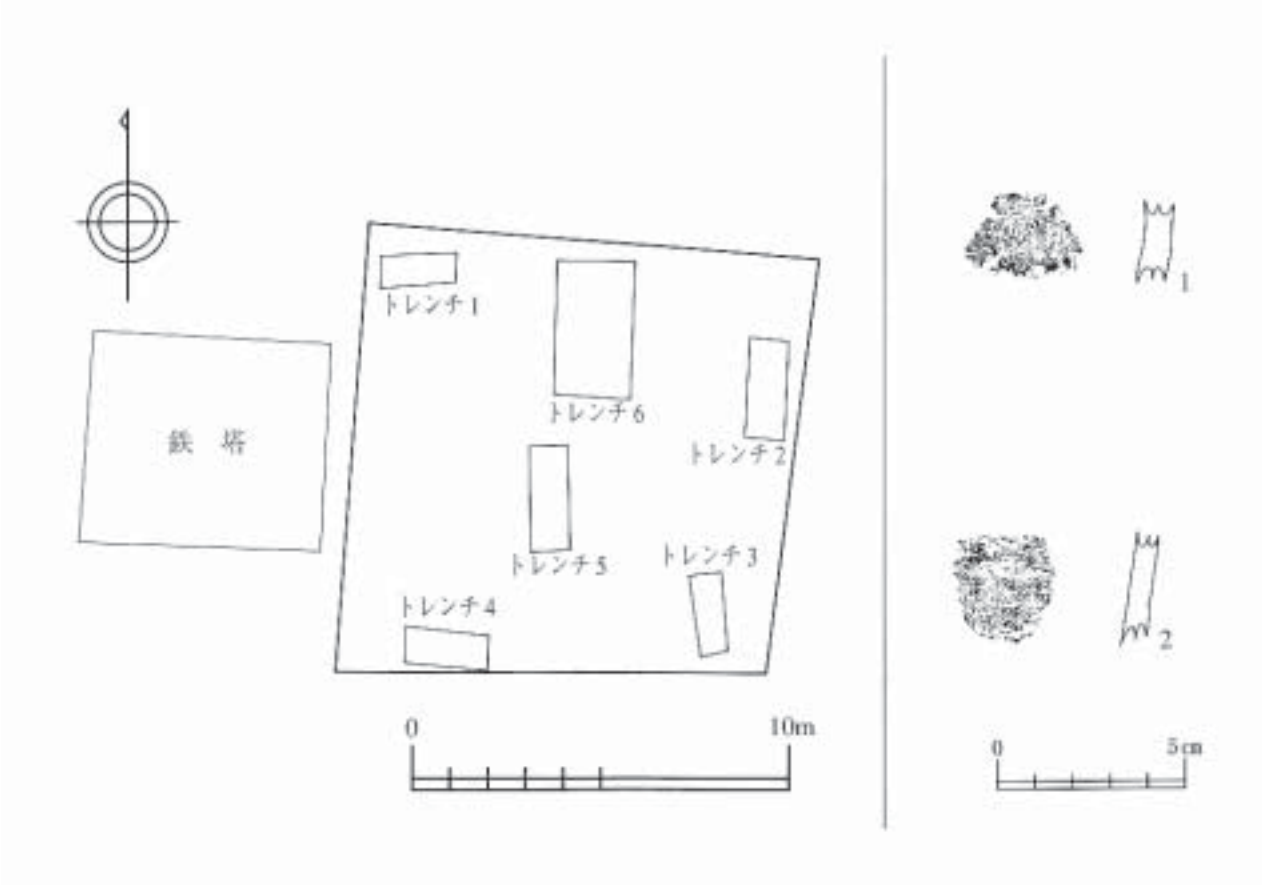
調査に至る経過

東北電力株式会社青森支店より、青森市細越地区に計画中の送電線鉄塔建替工事予定地内に関する埋蔵文化財包蔵地の有無についての照会があり、遺跡地図との照合の結果、安田（2）遺跡（青森県遺跡台帳番号　01016）と重複することから、発掘調査の要否を判断するため、予定地内（144㎡）の確認調査を実施した。

調査結果

本地域は丘陵地の緩やかな斜面上に立地し、現況は山林（一部畑地）である。方形を呈する予定地内に 6 箇所のトレンチを設置し、遺構・遺物確認を行った。結果、部分的に風倒木痕がみられる以外はプライマリーな土層の堆積が確認できたが、遺構は確認できず、平安時代の土師器の微細な破片 3 点が出土したのみであった。この結果、発掘調査は不要と判断した。

（設　楽）



第 14 図　トレンチ配置図・出土遺物

第３節　雲谷地区：（仮称）青森市芸術創作工房建設予定地内試掘調査

調査対象等

1. 調　査　地：青森市合子沢字山崎 152 － 6、153 － 1
2. 開発行為：公共施設建設（(仮称）青森市芸術創作工房整備事業）
3. 調査期間：平成 12 年 7 月 24 日～ 31 日

調査に至る経過

青森市（主管：企画調整課）は青森市南部に所在する雲谷地区に（仮称）青森市芸術創作工房建設を計画した。付近には桜峯（1）遺跡、雲谷山吹（3）遺跡など縄文時代を主体とする遺跡が立地していることから周辺部に未発見の遺跡が所在することが予想され、予定地内に対する埋蔵文化財包蔵地の有無について確認する必要性が生じていた。

当委員会では工事対象予定地区5,072㎡に対して試掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無確認を行うこととした。

調査方法

工事着手時期が差し迫っており、建設予定の建築物（中央棟・作業棟・宿泊棟）の構造が円形状を呈するもの（中央棟）が含まれていたため、トレンチの設定については建設予定の構造物ごとに設定し、放射状ならびに直線状になるようにした。番号については構造物毎に番号を付与した。土地そのものの所有者が青森市で、調査対象地が青森公立大学建設時に取得した土地であったため、遺構検出時点で周辺部へ伸びる前提で調査にあたった。

調査前の現況が山林であったため、一部工事着手に先行して伐採を依頼し、人力ならびに重機による掘削で堆積土の厚さ、遺構・遺物の有無確認を優先して調査にあたった。

総調査面積は624㎡である。

調査結果

調査結果の記述に際して、建設予定の構造物毎の調査結果を記述する。

中央棟

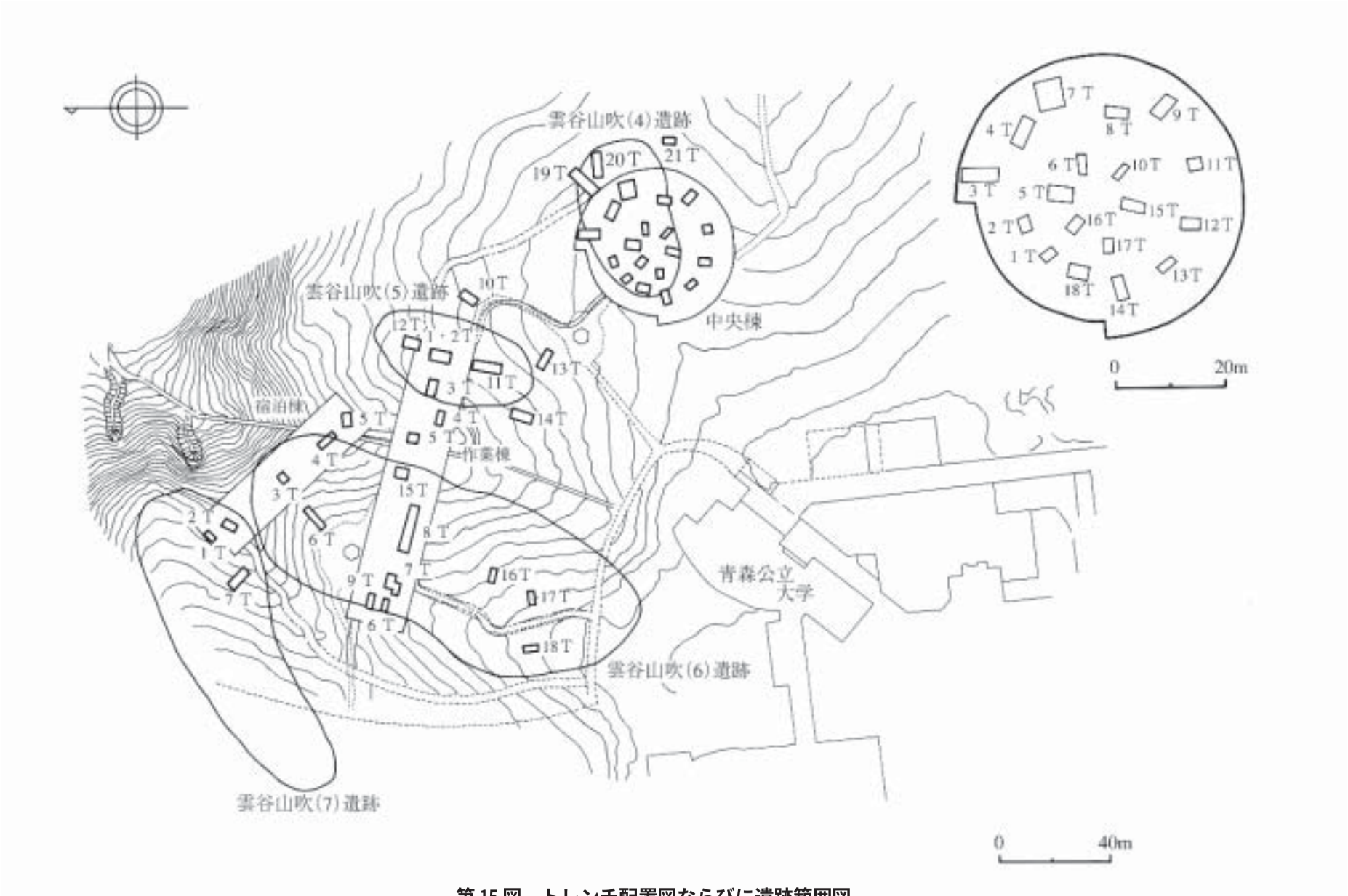
トレンチ１＝35㎝・遺物有り、土坑１基、2＝28㎝・遺物有り、3＝34㎝、4＝39㎝、5＝42㎝、6＝36㎝、7＝46㎝・遺物有り、8＝49㎝、9＝50㎝、10＝38㎝、11＝51㎝、12＝50㎝、13＝50㎝、14＝34㎝、15＝41㎝、16＝45㎝、17＝41㎝、18＝43㎝・遺物有り、19（拡張）＝45㎝、20（拡張）＝43㎝、21（拡張）＝52㎝

宿泊棟

トレンチ１＝104㎝・遺物有り、2＝62㎝・遺物有り、土坑１基、3＝66㎝、遺物有り、4＝56㎝、遺物有り、5＝45㎝、6（拡張）＝20㎝、7（拡張）＝40㎝

作業棟

トレンチ１＋2＝24㎝・遺物有り、土坑３基、3＝35㎝・遺物有り、4＝57㎝、5＝65㎝、6＝25㎝、



第 15 図　トレンチ配置図ならびに遺跡範囲図

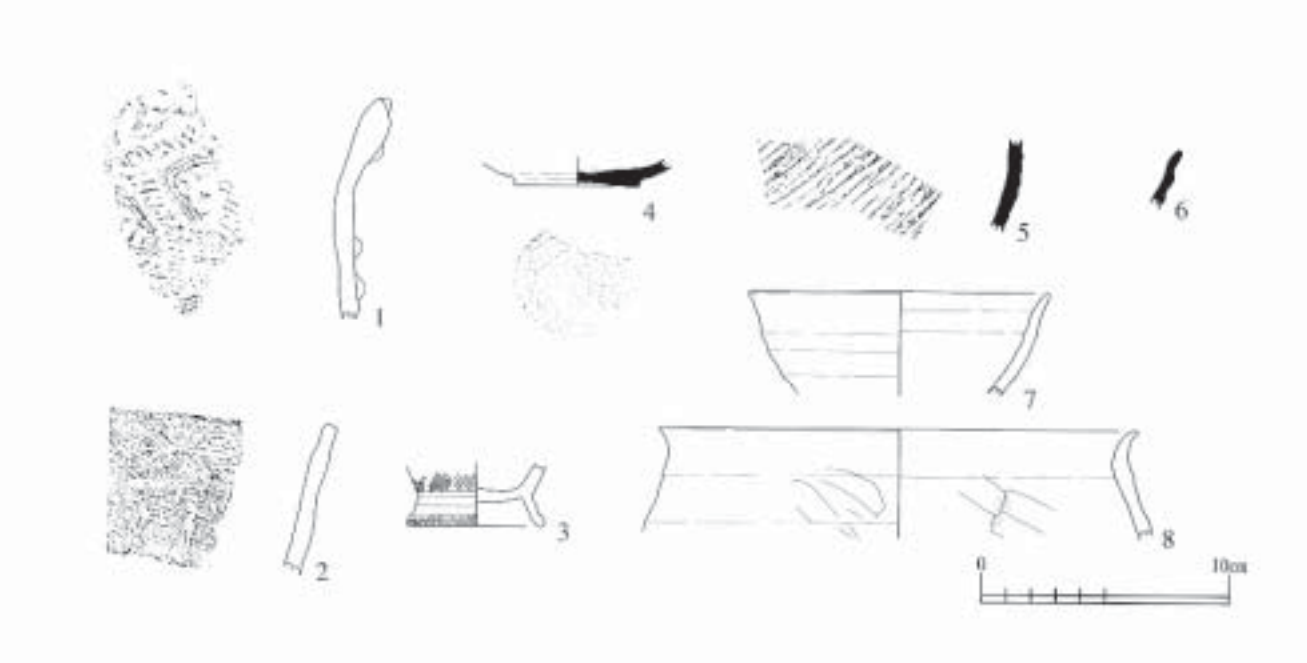
7＝20㎝・遺物有り、住居跡１軒、8＝40㎝・遺物有り・住居？１軒、9＝23㎝、10（拡張）＝43㎝、11（拡張）＝21㎝、12（拡張）＝22㎝・遺物有り、住居跡１軒、土坑２基、13（拡張）＝56㎝、14（拡張）＝45㎝、15（拡張）＝96㎝、16（拡張）＝25㎝・遺物有り、17（拡張）＝35㎝、18（拡張）＝10㎝～・遺物多量

中央棟から出土した遺物は、縄文時代中期ならびに晩期の土器が出土しており、遺構は土坑が１基検出したのみで他は小ピットが確認できた。調査成果から雲谷山吹（4）遺跡として登録した。

作業棟部分については沢をへだてた部分で地形が異なり、東側の地区では縄文時代晩期ならびに平安時代の遺物、平安時代の竪穴住居跡、土坑を確認した。調査成果から雲谷山吹（5）遺跡として登録した。西側の地区は縄文時代後期ならびに平安時代の遺物が出土しており、竪穴住居１＋１？棟（発掘調査で１棟と確認）を確認した。丘陵の先端部である宿泊棟の一部にも住居跡を検出していることから作業棟の西側と宿泊棟の東側部分を含めた丘陵上に位置する範囲を雲谷山吹（6）遺跡として登録した。この遺跡は南側に伸びているものと考えられる。

宿泊棟部分は前述のとおり東側部分は雲谷山吹（6）遺跡として登録したが、西側部分は西側に延びた丘陵上に立地しており、出土遺物が縄文時代前期ならびに平安時代であったため雲谷山吹（7）遺跡として別途登録した。地形・出土遺物の内容が各遺跡とも異なっており、一括の考え方では遺跡が抱える性格・構成等を考える上で支障がきたすと判断したためこのような取扱いとした。

（木　村）



第16図　出土遺物

第４節　大別内地区：八甲田霊園第２期造成工事予定地内試掘調査

調査対象等

1. 調査地：青森市大字大別内字葛野 116 － 2
2. 開発行為：公共施設建設（八甲田霊園第２期造成工事）
3. 調査期間：平成 12 年 11 月 6 目～ 11 月 10 日

調査に至る経過

青森市南西部に所在する八甲田霊園において、既存地から北側に向かって霊園を拡張する工事が青森市によって計画された。本予定地は、平成８・10 年度に当委員会が調査を実施し平安時代の集落跡の一部を検出した葛野（2）遺跡から南側に直線距離にして約 500㎜離れたところにあたる。平成８・10 年度の調査結果を踏まえると、遺構の拡がりが南側即ち本予定地へ伸びていくことが想定されたため、予定地内の埋蔵文化財の有無確認を行う必要が生じた。

よって、最も早い時期に工事着手がなされる調整池予定地部分（7,988㎡）を調査対象として、試掘調査を行うこととした。

調査方法

調査対象地区は、樹木が繁茂する山林であり、地形的にみて中央を東西方向に走る沢地形を挟んで南北に平坦部分が存在するという状況であった。遺跡の有無確認を主目的として、ほぼ正方形を呈する予定地内の主に南北の平坦部分にトレンチを設置した。各トレンチは重機で表土除去し、人力で鋤簾がけをして、遺構確認を行った。

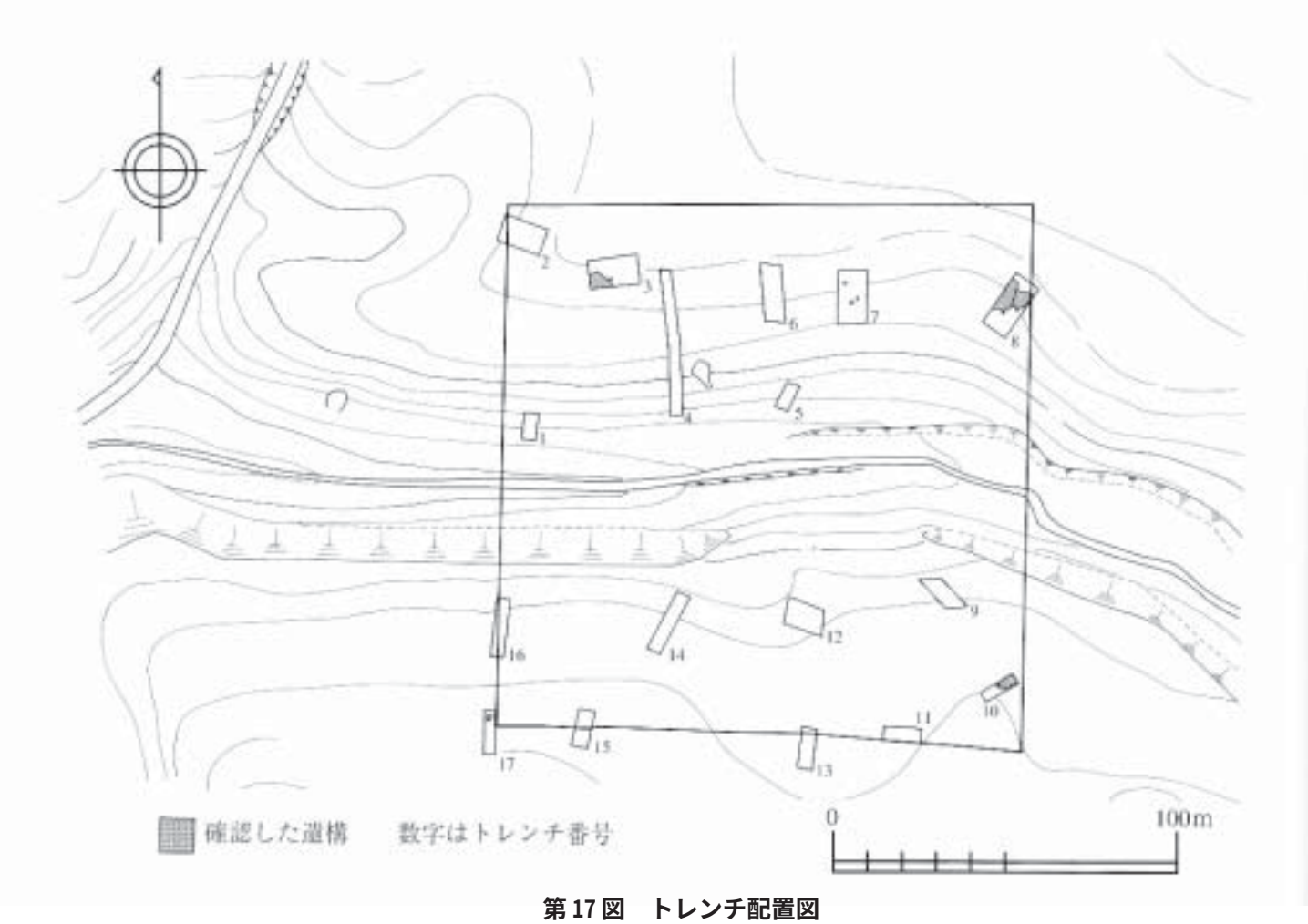
調査結果

調査の結果、平坦部分においては、トレンチ一部 70㎝程度の層厚がみられる部分があるが、平均して 20 ～ 30㎝の黒色・黒褐色土の層厚であった。

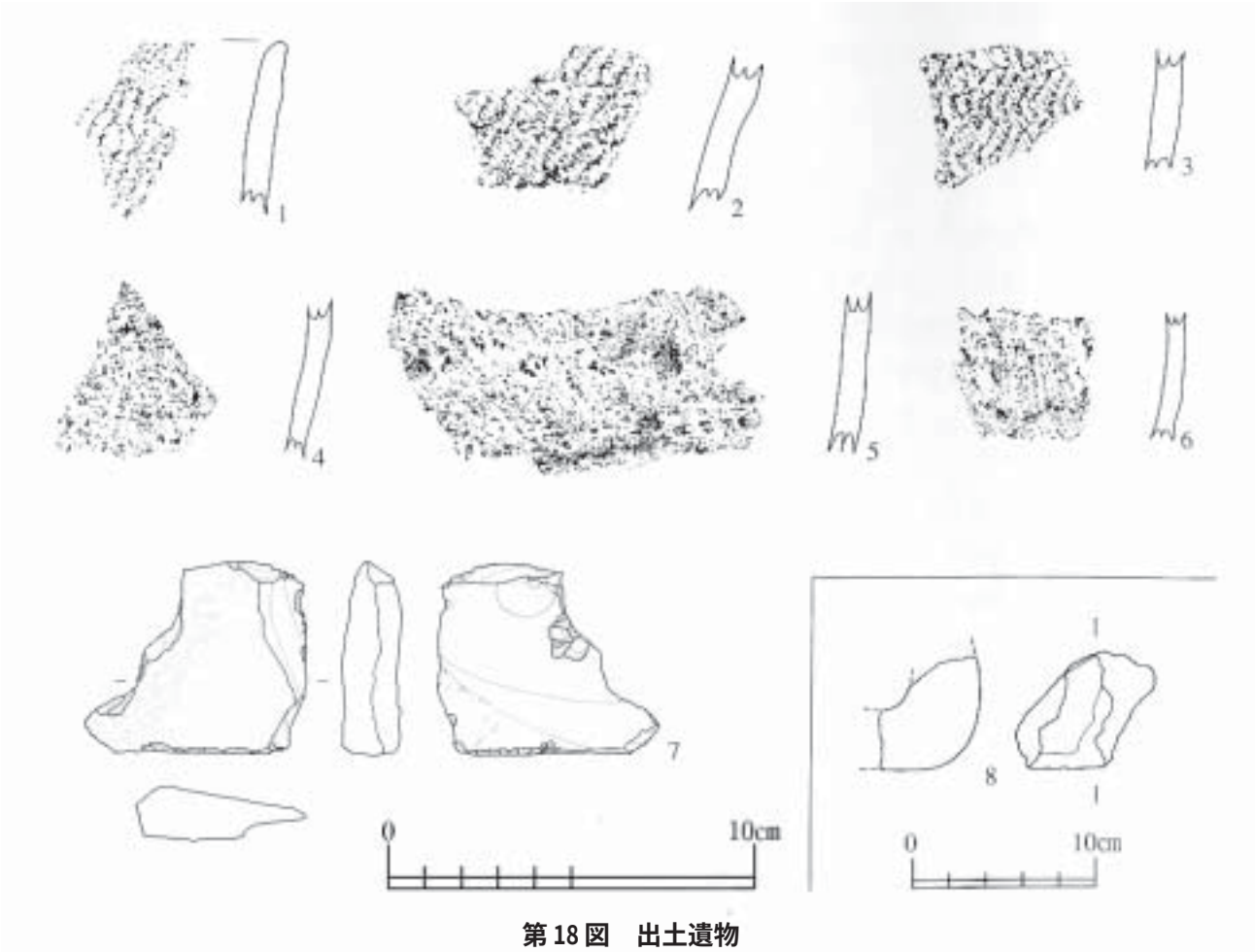
各トレンチにおける遺構確認状況は次のとおりである。

トレンチ１＝遺構・遺物なし。トレンチ２＝遺構・遺物なし。トレンチ３＝竪穴住居跡１軒を確認し、土師器の破片１点が出土した。トレンチ４＝遺物なし。トレンチ５＝遺物なし。トレンチ６＝縄文時代前期の土器が１片出土したが遺構は確認できなかった。トレンチ７＝土坑３基。トレンチ８＝竪穴式住居跡２軒を確認し、縄文時代前期の土器片１点、土師器の破片３点が出土した。トレンチ９＝遺構・遺物なし。トレンチ 10 ＝竪穴住居跡１軒。トレンチ 11 ＝焼成土坑１基。トレンチ 12 ＝遺構・遺物なし。トレンチ 13 ＝縄文時代前期の土器片が１点出土したが遺構は確認できなかった。トレンチ 14 ＝遺構・遺物なし。トレンチ 15 ＝遺構・遺物なし。トレンチ 16 ＝遺構・遺物なし。トレンチ 17 ＝焼成土坑１基。その他、沢の北側斜面より炭窯２基を確認した。

土坑については帰属時期不明であるが、住居跡４軒、焼成土坑２基は平安時代、炭窯については中世以降に帰属するものである。したがって、本予定地内周辺においては、主に平安時代の集落跡が展開している可能性が高いことから、葛野（3）遺跡として登録した。来年度以降、さらに周辺の試掘調査と、調整池予定地部分の発掘調査を行う予定である。　（設　楽）



第17図　トレンチ配置図



第18図　出土遺物

第 5 節　近野遺跡

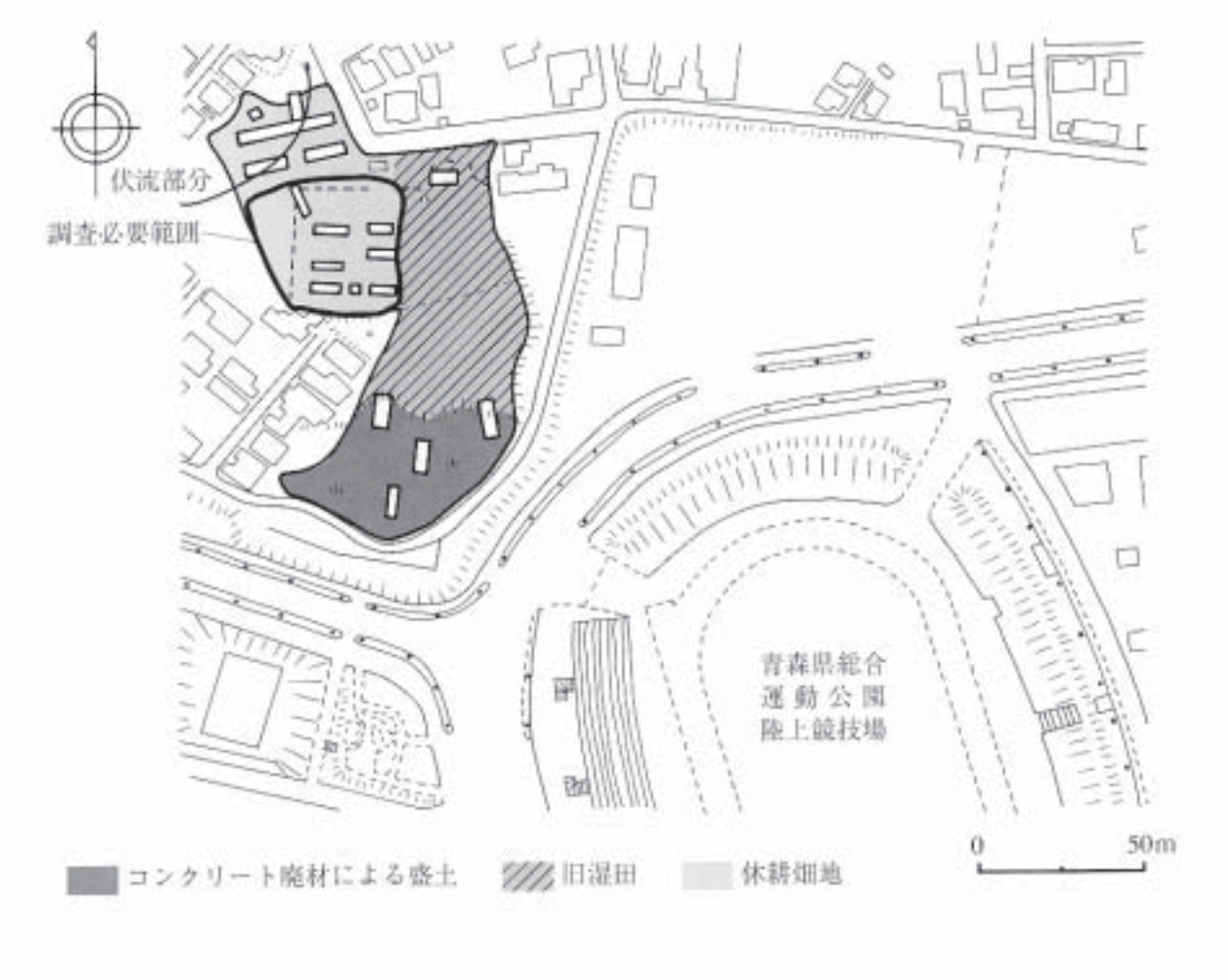
調査対象等

1. 調　査　地：青森市安田字近野 276 － 1
2. 開発行為：分譲宅地開発
3. 調査期間：平成 21 年 10 月 16 日～ 20 日

調査に至る経過

周知の遺跡である近野遺跡（青森県遺跡台帳番号　01065）内において民間の分譲宅地造成計画があり、開発予定者の予定地内における埋蔵文化財包蔵地有無確認の書類照会の際、事前に協議必要の回答を提示した。協議において現況での保存が難しく、記録保存の発掘調査が事前に必要となったが、対象地が近野遺跡の遺跡範囲の外郭部分にあたることからその包蔵状況・内容について試掘調査を実施し確認する必要性が生じた。

当委員会では工事対象予定地区約8,364㎡を対象面積とし試掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無確認を行うこととした。



第 19 図　トレンチ配置図ならびに調査必要範囲図

調査方法

調査対象区は廃材の盛土、旧湿田であった荒蕪地ならびに休耕畑地であり、人力ならびに重機による掘削で堆積土の厚さ、遺構・遺物の有無確認を優先して調査にあたった。調査着手時期が雨天の続いた秋口からの調査であったため、湧水が激しく旧湿田であった部分については一部の調査に留まらざるを得なかった。総調査面積は496㎡である。

調査結果

調査結果の記述に際して、現況の土地利用状況毎の調査結果を記述する。

旧湿田地点

当初人力よる掘削を計画したが、予想以上に湧水が激しいため重機による掘削を１地点のみ行うことに変更した。黒褐色粘質層が1mほど堆積しておりそれ以下は有機物を多量に含む黒茶褐色腐食土が3mほど堆積しており、さらに黒褐色泥炭層が堆積しており、青灰色砂質土、灰色砂質土が堆積しており、砂質土直上には栃の実等の植物種子が包含していた。黒茶褐色有機物包含層部分から湧水が激しく土層崩落が激しかったため土層堆積図等の作成は不可能であった。最下層までの掘り下げ深度は現地表面から約5mである。掘削土の遺物包含状況を確認したが人工的遺物の出土は見られなかった。

廃材等による盛土地点

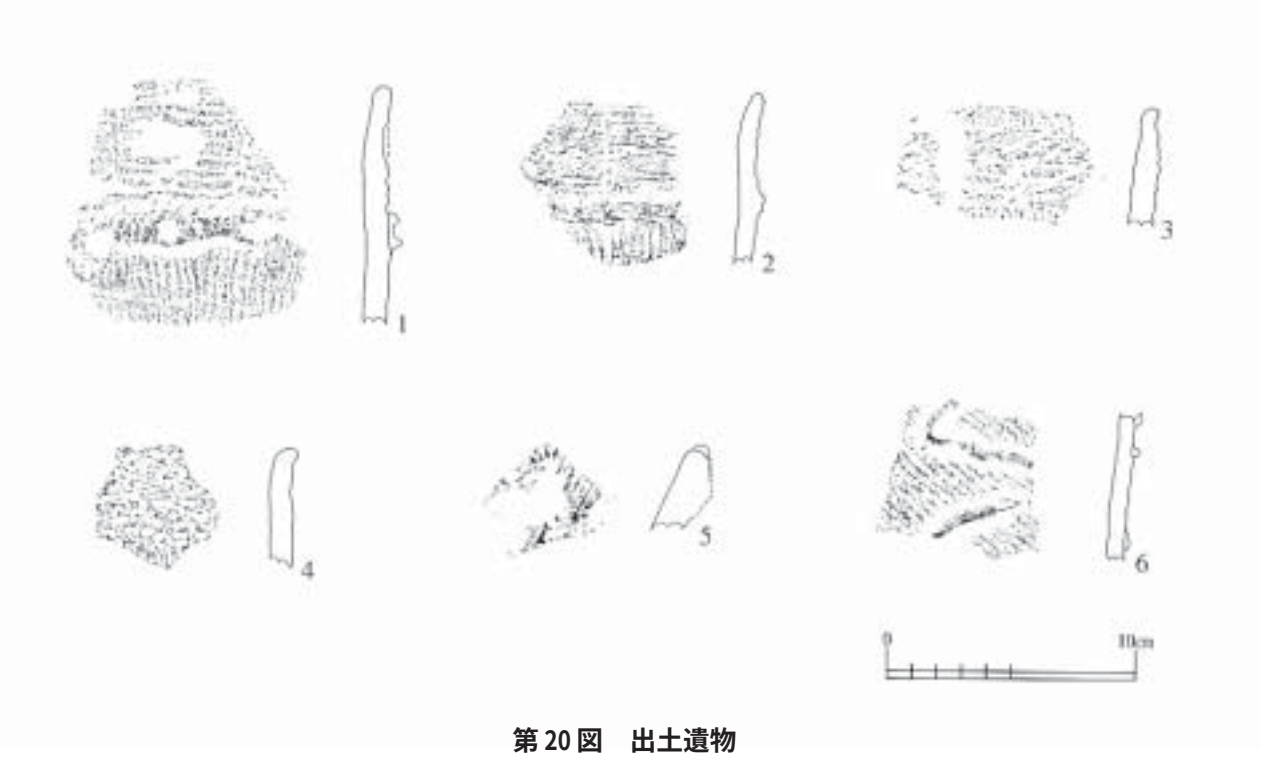
人力による掘削が旧湿田部分同様不可能で重機によるトレンチ掘りを4ヶ所行った。各地点とも旧湿田部分から延長する土層堆積状況を呈しており、伏流水による土層崩落が著しく同様に土層堆積図を作成不可能であった。トレンチ南端部分に向けて傾斜が上ってくるような部分もあり、現地表面（盛土）からの掘削深度は約４～4.5mである。出土遺物はなかった。

旧畑地地点

耕作や土地境界等の問題のない地点を重機による表土処理ならびに人力による掘削により調査した。北側の住宅地に近い部分は堆積土が耕作土の１層のみで含水量が高く、現地表面からぬかるんだ状況であった。付近の住民等に話をきいたところによると調査対象地の丘陵上部に湧水点があるらしく、調査対象区の一部にも伏流が達しているとのことであった。伏流部分から遺構の検出ならびに遺物の出土はなかった。

南側の地点では丘陵上方では耕作土が15cm～20cmほど堆積しており、下部に漸移層が部分的に残存しており、縄文土器が出土し、遺構の確認ができた。湿田側との境界部分の堆積土の厚さは最深60cmを測り、一部耕作による撹乱により堆積が乱されていたが部分的に縄文時代前期の遺物包含層が認められた。

以上の調査結果から遺物包含層ならびに遺構検出の認められた旧畑地部分の伏流のない地点を中心とした地区約1,500㎡を発掘必要対象区として設定した。発掘調査については開発予定者との協議の結果、次年度に本発掘調査を実施する予定である。



第20図　出土遺物

出土遺物の概観について

いずれの土器片についても撹乱部分ならびに包含層上面での取り上げであったため剥離・剥落・摩滅がある資料が主体である。1～4は縄文時代前期円筒下層b式に属する土器で、1は胎土に頁岩の小礫を微量、赤色粒を多量に含み、繊維混入痕が顕著である。口縁部文様帯には摩滅・剥離が激しいが単軸絡条体4類が施され、口縁部文様帯と胴部との区画には隆帯により区画されている。隆帯上には棒状工具による刺突が施される。胴部地文には単軸絡条体1類が施されている。2の口縁部文様帯には結節回転文が施され、胴部との区画帯には微隆起させた隆帯上に撚糸による圧痕文が施される。胴部地文は1と同様である。外面の一部に炭化物が付着している。3は他の資料と異なり外面の色調が浅黄色を呈し、内面には黒斑が観察される個体で、口縁部文様帯は単軸絡条体5類と絡条体圧痕による文様構成で、地文の一部に圧痕が残存している。口唇部直下の絡条帯圧痕は口唇部を軽く外反させるようにやや深く押圧されている。4の口縁部文様帯は地文に複節RLR斜縄文が施されたのち結節回転文が施される。5・6は縄文土器中期の土器で、5は波状口縁の口唇部付近の資料であるが、剥離のため貼付隆帯の一部が観察できるのみである。6は円筒上層d式に属する胴部資料で地文に結束第1種が施され、貼付隆帯により文様が構成されているが欠損資料につき詳細は不明である。

（木　村）

ま　と　め

今年度、当委員会が実施した市内遺跡発掘調査事業に関して、分布調査ならびに試掘調査の結果から新規登録遺跡6箇所、範囲変更2箇所の遺跡の登録・変更がなされた。その結果、平成13年3月末現在で青森市内には周知の遺跡が309箇所（欠番1箇所を除く）の遺跡が所在することとなった。また、開発行為に関する試掘（確認）調査によってこれまで表面観察のみでしか知り得ることのなかった遺跡の内容を確認し、基礎資料を整備することができた。

現在、青森市内は高規格道路や空港からのアクセス道路の整備事業や今後展開が予想される新幹線建設関連等の大規模な公共事業や下水道整備等の小規模な公共事業以外に多くの個人・民間業者による開発行為が繰り広げられているのが現状である。市民の遺跡に対する目も「三内丸山」以後マスコミ等で連日報道され意識される状況であるが、実際のところそれはどこか箱庭的な他の空間での出来事のように捉えられてしまう傾向にあるのもまた事実である。現実に本報告に掲載したいくつかの遺跡は破壊され、その残滓が野にさらされている状況を目の当たりにさせられた次第で、マスコミの報じる「最古・最大級・珍奇」型式の報道主体では光のみが強調されてしまい、捏造事件のような闇を安易に起こすような甘えに寄与することとにもなりかねない。光の影に葬られる無言の訴えに対して今後どれだけの事例を救えるのか、本市の埋蔵文化財保護行政の組織的整備に内からの改革と他者からの視点が進まないことには、市民の埋蔵文化財に対する本当の理解へとはつながらないものと考えられる。

最後になりましたが情報報提供をくださった市民の方々にはご協力を賜り深く感謝しております。

（木　村）

引用参考文献

青森県教育委員会　1998　『白砂・大沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第246集
青森県教育委員会　1999　『大矢沢野田（1）遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第270集
青森市教育委員会　1971　『大浦遺跡調査報告書』青森市の文化財7
青森市教育委員会　1999　『葛野（2）遺跡発掘調査報告書Ⅱ』青森市埋蔵文化財調査報告書第44集
青森市教育委員会　2000　「第Ⅲ章　内真部（9）遺跡発掘調査」『市内遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第53集

図版番号	遺　跡　名	出土区	層　位	分類	器種	外面特徴・調整	内面特徴・調整	備　　考
第７図－１	雲谷山吹(8)		表採	縄文土器	深鉢	結節羽状縄文	粗いミガキ	
第７図－２	雲谷山吹(8)		表採	縄文土器	深鉢	網目状撚糸文（摩滅）	やや粗いミガキ	
第９図－１	四ツ石		表採	縄文土器	深鉢	ＬＲ縄文（摩滅）	摩滅	外面黒斑有り
第９図－２	四ツ石		表採	縄文土器	深鉢	波状口縁、貼付隆帯、ＲＬ縄文	やや丁寧なミガキ	
第９図－３	四ツ石		表採	縄文土器	深鉢	沈線、ミガキ	丁寧なミガキ	内面炭化物付着
第９図－４	四ツ石		表採	縄文土器	深鉢	沈線、ミガキ	丁寧なミガキ	口唇部もミガキ
第９図－５	四ツ石		表採	縄文土器	深鉢	沈線、ＬＲ縄文（斜行・横走）	丁寧なミガキ	一部剥離
第９図－６	四ツ石		表採	縄文土器	深鉢	ナデ	ナデ	底面工具痕
第９図－７	四ツ石		表採	土師器	甕	ヘラケズリ	ナデ	
第12図－１	大浦	14	遺物包含層	Ⅰ	深鉢	口縁撚糸圧痕、胴部結節羽状縄文、ＲＬ縄文	やや雑なミガキ	胎土植物繊維含む
第12図－２	大浦	17	遺物包含層	Ⅱ	深鉢	橋状把手、縄文圧痕	やや雑なミガキ	
第12図－３	大浦	17	遺物包含層	Ⅱ	深鉢	山形口縁、隆帯、縄文圧痕	ナデ	
第12図－４	大浦	17	遺物包含層	Ⅱ	深鉢	山形口縁、隆帯、縄文圧痕	ナデ	
第12図－５	大浦	17	遺物包含層	Ⅱ	深鉢	口縁波状の隆帯、ドーナツ状の隆帯、ＬＲ縄文	指頭圧痕、ナデ	
第12図－６	大浦	6	遺物包含層	Ⅲ	深鉢	波状口縁、斜線や楕円形の沈線	やや雑なミガキ	
第12図－７	大浦	6	遺物包含層	Ⅲ	深鉢	波状口縁、斜線や楕円形の沈線	やや雑なミガキ	
第12図－８	大浦	6	遺物包含層	Ⅲ	深鉢	波状口縁、斜線や楕円形の沈線	やや雑なミガキ	
第12図－９	大浦	14	遺物包含層	Ⅳ－１	深鉢	小波状口縁、無文、軽いナデ、輪積痕	軽いナデ	
第12図－10	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－１	深鉢	小波状口縁、無文、ナデ、輪積痕	やや丁寧なミガキ	
第12図－11	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－１	深鉢	小波状口縁、無文、軽いナデ、輪積痕	軽いナデ	
第12図－12	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－１	深鉢	小波状口縁、無文、軽いナデ、輪積痕	軽いナデ	
第12図－13	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－１	深鉢	小波状口縁、無文、軽いナデ、輪積痕	やや丁寧なミガキ	
第12図－14	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－１	深鉢	小波状口縁、無文、ナデ、輪積痕	軽いナデ	
第12図－15	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－１	深鉢	小波状口縁、無文、軽いナデ	やや雑なミガキ	補修孔
第12図－16	大浦	14	遺物包含層	Ⅳ－１	深鉢	小波状口縁、無文、軽いナデ	軽いナデ	
第12図－17	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－１	深鉢	小波状口縁、無文、軽いナデ	軽いナデ	
第12図－18	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－１	深鉢	小波状口縁、無文、やや丁寧なミガキ	磨滅	
第12図－19	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－１	深鉢	小波状口縁、無文、やや丁寧なミガキ	やや丁寧なミガキ	
第12図－20	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－２	深鉢	小波状口縁、平行沈線文、ＬＲ縄文	やや丁寧なミガキ	
第12図－21	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－３	深鉢	小波状口縁、平行沈線文、条痕文	やや雑なミガキ	
第12図－22	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－３	深鉢	小波状口縁、平行沈線文、条痕文	丁寧なミガキ	
第12図－23	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－４	深鉢	口縁小突起、平行沈線文、条痕文	軽いナデ	
第12図－24	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－５	深鉢	平坦口縁、条痕文	ナデ	
第12図－25	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－５	深鉢	平坦口縁、平行沈線文、条痕文	やや雑なミガキ	
第12図－26	大浦	14	遺物包含層	Ⅳ－５	深鉢	平坦口縁、平行沈線文、条痕文	雑なミガキ	
第12図－27	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－５	深鉢	平坦口縁、平行沈線文、条痕文	やや雑なミガキ	
第12図－28	大浦	14	遺物包含層	Ⅳ－６	深鉢	無文、やや雑なミガキ	やや丁寧なミガキ	補修孔
第12図－29	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－６	深鉢	小波状口縁、無文、ナデ、輪積痕、二次被熱痕	やや雑なミガキ	
第12図－30	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－７	深鉢	平行沈線文、ＬＲ縄文	やや雑なミガキ	
第12図－31	大浦	10	遺物包含層	Ⅳ－７	深鉢	ＲＬ縄文	軽いナデ	
第12図－32	大浦	10	遺物包含層	Ⅳ－７	深鉢	ＲＬ縄文	軽いナデ	
第12図－33	大浦	14	遺物包含層	Ⅳ－８	深鉢	平行沈線文、条痕文	やや丁寧なミガキ	
第12図－34	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－８	深鉢	条痕文	やや丁寧なミガキ	
第12図－35	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－８	深鉢	条痕文	やや雑なミガキ	
第12図－36	大浦	14	遺物包含層	Ⅳ－９	鉢	口縁刻目、平行沈線文、粘土粒貼付、条痕文	ナデ	
第12図－37	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－９	鉢	平行沈線文	ナデ	
第12図－38	大浦	14	遺物包含層	Ⅳ－９	鉢	口縁刻目、平行沈線文、粘土粒貼付	丁寧なミガキ	

図版番号	遺　跡　名	出土区	層　位	分類	器種	外面特徴・調整	内面特徴・調整	備　　考
第12図－39	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－９	鉢	平行沈線文、粘土粒貼付、ＲＬ縄文	やや雑なミガキ、炭化物付着	
第12図－40	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－１０	鉢	山形のスリット	山形のスリット（剥離）	
第12図－41	大浦	17	遺物包含層	Ⅳ－１１	壷	平行沈線文、ナデ	軽いナデ	胎土中海綿骨針含む
第12図－42	大浦	2	一括	Ⅴ	甕	平行沈線文、波状沈線文	雑なミガキ	
第12図－43	大浦	14	遺物包含層	礫石器	すり石	スリ、石質：安山岩、11.0cm×7.2cm×2.9cm、重さ340g		
第13図－１	大浦	18	遺物包含層	須恵器	甕	タタキ	ナデ	骨針有
第13図－２	大浦	5	遺物包含層	須恵器	甕	タタキ	ナデ	骨針有
第13図－３	大浦	18	遺物包含層	土師器	小甕	ヘラケズリ	ナデ	底面ナデ、底径6.6cm
第13図－４	大浦	18	遺物包含層	土師器	小甕	ヘラケズリ	ナデ	底面木葉痕、底径7.0cm
第13図－５	大浦	18	遺物包含層	製塩土器		ナデ	ナデ	口径（19.0）cm
第13図－６	大浦	18	遺物包含層	製塩土器		ナデ	ナデ	輪積痕
第13図－７	大浦	18	遺物包含層	製塩土器		ナデ	ナデ	輪積痕
第13図－８	大浦	18	遺物包含層	製塩土器		ナデ	ナデ	輪積痕
第13図－９	大浦	18	遺物包含層	製塩土器		ナデ	ナデ	底面板痕、底径21.0cm
第13図－10	大浦	18	遺物包含層	製塩土器		ナデ	ナデ	底面板痕、底径19.6cm
第13図－11	大浦	18	遺物包含層	製塩土器		ナデ	ナデ	底面板痕、底径19.8cm
第13図－12	大浦	18	遺物包含層	製塩土器		ナデ（指頭圧痕有）	ナデ	底面板痕、底径20.4cm
第13図－13	大浦	18	遺物包含層	土製支脚	棒状	ナデ	―	最大幅4.7cm、孔径1.1cm
第13図－14	大浦	18	遺物包含層	土製支脚	円筒状	ナデ（ナデ消し顕著）	ナデ	端部板痕
第13図－15	大浦	18	遺物包含層	土製支脚	円筒状	ナデ	無調整	頁岩小礫混入
第14図－１	安田(2)	ﾄﾚﾝﾁ4	表土	土師器	甕	ヘラケズリ	ナデ	
第14図－２	安田(2)	ﾄﾚﾝﾁ4	表土	土師器	甕	ヘラケズリ	ナデ	
第16図－１	雲谷山吹(4)	7	遺物包含層	縄文土器	深鉢	（波状口縁）、貼付隆帯、馬蹄形圧痕、Ｌ圧痕	丁寧なミガキ	
第16図－２	雲谷山吹(6)	17	遺物包含層	縄文土器	深鉢	網目状撚糸文＋ナデ	ナデ	
第16図－３	雲谷山吹(4)	2	遺物包含層	縄文土器	台付鉢	沈線、ＲＬ縄文	丁寧なミガキ	高台径5.6cm
第16図－４	雲谷山吹(7)	1	遺物包含層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	底径4.9cm、底部切離：離し糸切　火襷痕
第16図－５	雲谷山吹(6)	8	遺物包含層	須恵器	甕	タタキ	ナデ	外面自然釉付着
第16図－６	雲谷山吹(6)	7	遺物包含層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	重ね焼痕、火襷痕
第16図－７	雲谷山吹(6)	16	遺物包含層	土師器	椀	ロクロナデ	ロクロナデ	口径12.0cm、重ね焼き痕（軟質須恵器？）
第16図－８	雲谷山吹(6)	8	遺物包含層	土師器	甕	ナデ/ヘラケズリ	ナデ/ヘラケズリ	口径19.2cm
第18図－１	葛野(3)	ﾄﾚﾝﾁ6	表土	縄文土器	深鉢	ループ文（ＬＲ）	ナデ	
第18図－２	葛野(3)	ﾄﾚﾝﾁ8	表土	縄文土器	深鉢	ループ文（ＬＲ）	ミガキ	
第18図－３	葛野(3)	ﾄﾚﾝﾁ13	表土	縄文土器	深鉢	ループ文（ＬＲ）	ミガキ	
第18図－４	葛野(3)	ﾄﾚﾝﾁ8	表土	土師器	甕	ヘラケズリ	ナデ	
第18図－５	葛野(3)	ﾄﾚﾝﾁ8	表土	土師器	甕	ヘラケズリ	ナデ	二次被熱有り
第18図－６	葛野(3)	ﾄﾚﾝﾁ8	表土	土師器	甕	ヘラケズリ	ナデ	
第18図－７	葛野(3)	ﾄﾚﾝﾁ8	表土	石器	不定形	―	―	
第18図－８	葛野(3)	ﾄﾚﾝﾁ10	表土	羽口	―	ナデ	―	還元を受けている
第20図－１	近野	⑦	遺物包含層	縄文土器	深鉢	絡条帯回転文、貼付隆帯、刺突	ナデ	器面の剥離・剥落著しい
第20図－２	近野	⑦	遺物包含層	縄文土器	深鉢	結節回転文、Ｒ圧痕	ナデ	外面炭化物付着
第20図－３	近野	⑦	遺物包含層	縄文土器	深鉢	網目状撚糸文、絡条帯圧痕	丁寧なミガキ	内面黒斑、器面一部剥離
第20図－４	近野	③	遺物包含層	縄文土器	深鉢	ＲＬＲ縄文＋結節回転文	ミガキ	
第20図－５	近野	⑤	カクラン	縄文土器	深鉢	波状口縁、貼付隆帯、ＬＲ圧痕（剥落主体）	ミガキ	
第20図－６	近野	⑩	遺物包含層	縄文土器	深鉢	羽状縄文、貼付隆帯	摩滅	

写　真　図　版

調査区遠景（S→）

トレンチ1（W→）

トレンチ2（W→）

トレンチ3（W→）

トレンチ4（W→）

トレンチ5（W→）

トレンチ6（W→）

トレンチ8（W→）

写真1　大浦遺跡1

トレンチ 9（W →）

トレンチ 17（W →）

トレンチ 17　獣骨出土状況（W →）

トレンチ 18（E →）

出土遺物

写真 2　大浦遺跡 2

出土遺物 2

出土遺物 3

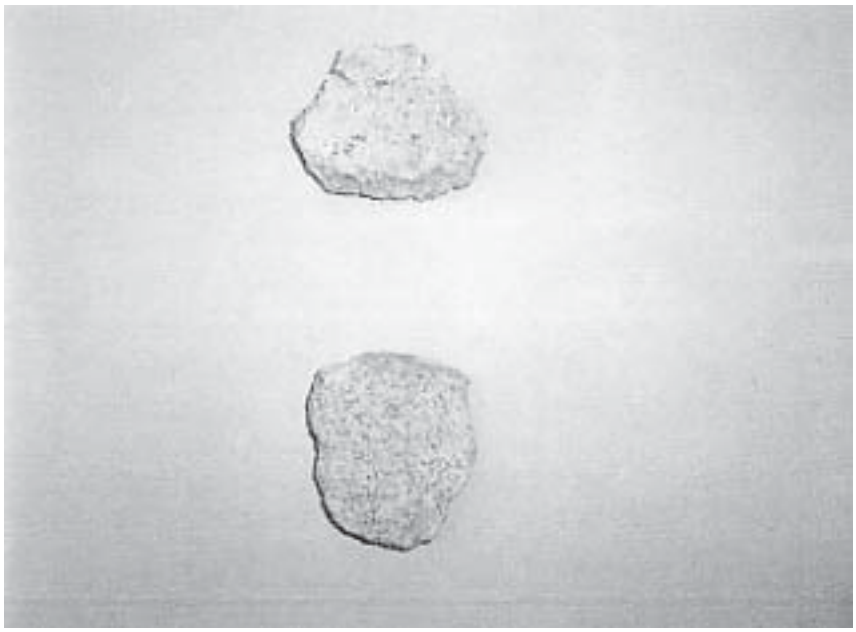
写真 3　大浦遺跡 3

遠景（N→）

作業風景

トレンチ２西壁（E→）

トレンチ４南壁（N→）



出土遺物

写真４　安田（2）遺跡

調査前風景（W→）

雲谷山吹（5）遺跡　トレンチ1（NW→）

雲谷山吹（6）遺跡　トレンチ7（NW→）

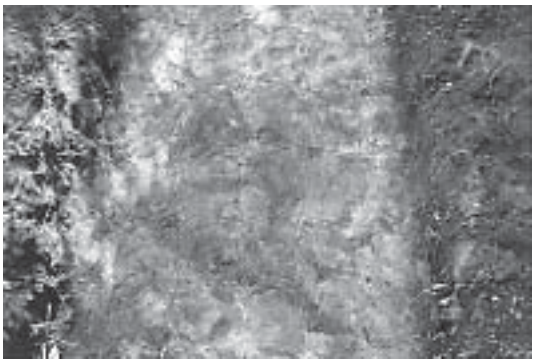
雲谷山吹（6）遺跡　トレンチ8（SW→）

出土遺物

写真5　雲谷山吹（4）～（7）遺跡

トレンチ3　住居跡確認状況（E→）

トレンチ8　住居跡確認状況（N→）



トレンチ17　焼成土坑確認状況（N→）

炭窯確認状況（S→）

出土遺物

写真6　葛野（3）遺跡

旧畑地　トレンチ①（S→）

旧畑地　トレンチ③（S→）

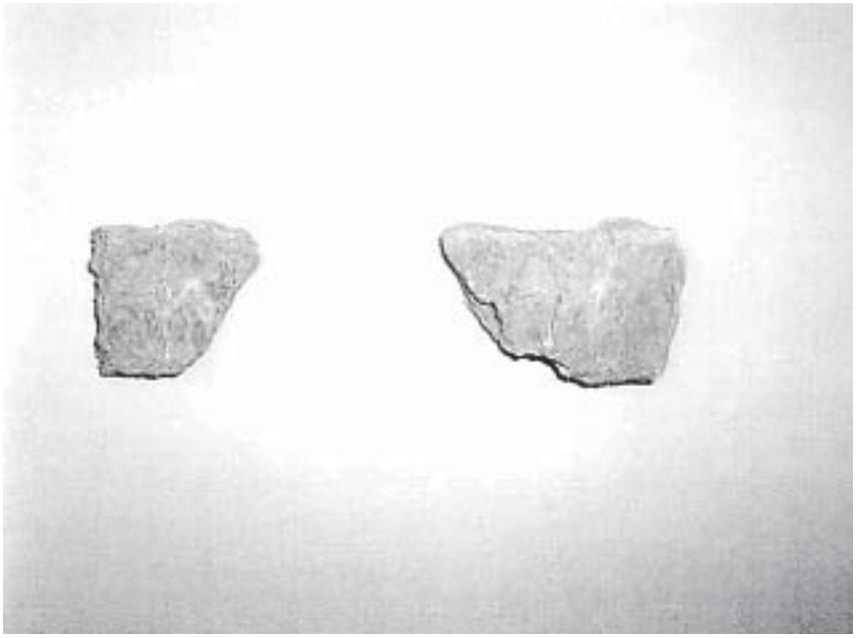
盛土部分　トレンチ①（E→）

旧湿田部分（W→）

出土遺物

写真７　近野遺跡

四ツ石遺跡採集土器



雲谷山吹（8）遺跡採集土器

写真８　四ツ石遺跡・雲谷山吹（8）遺跡

報　告　書　抄　録

ふりがな	しないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	市内遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第59集
編著者名	木村淳一、児玉大成、設楽政健
編集機関	青森市教育委員会
所在地	〒030-8555　青森県青森市中央一丁目22－5　　ＴＥＬ　017－734－1111
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おお うら 大浦	あおもりし のないあざ 青森市野内字 うらしま 浦島246－1ほか	02201	063	40° 53′ 57″	140° 50′ 19″	20000522 ～ 20000526	146	民間事業（資材置場）に係る試掘調査
やす た かっこに 安田（2）	あおもりし ほそごえあざ 青森市細越字 さかえ やま 栄山75－264ほか	02201	016	40° 47′ 35″	140° 43′ 1″	20000529 ～ 20000530	18	民間事業（鉄塔移設）に係る試掘調査
もややまぶきかっこよんかっこ 雲谷山吹(4)～(7)	あおもりしもや あざ 青森市雲谷字 やまぶき 山吹152－6、153－1	02201	303 304 305 306	40° 45′ 06″	140° 46′ 30″	20000724 ～ 20000731	624	公共事業に係る試掘調査
ちか の 近野	あおもりし やす だあざ 青森市安田字 ちかの 近野276－1	02201	065	40° 48′ 18″	140° 42′ 37″	20001016 ～ 20001020	496	民間事業（分譲住宅地）開発に係る試掘調査
くず の かっこさん 葛野（3）	あおもりし おつ ない 青森市大別内 くずの 葛野116－2	02201	308	40° 44′ 50″	140° 40′ 10″	20001106 ～ 20001110	444	公共事業に係る試掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大浦	散布地 製塩跡	縄文・弥生・平安	なし	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・製塩器	
安田（2）	散布地	縄文・弥生・平安	なし	土師器	
雲谷山吹(4)～(7)	集落跡	縄文・平安	竪穴住居跡・土坑	土師器・須恵器	
近野	集落跡	縄文	土坑・ピット	縄文土器	
葛野（3）	集落跡	縄文・平安・中世	竪穴住居跡・土坑・ピット・炭窯	縄文土器・土師器・石器・羽口	

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962	『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965	『四ツ石遺跡調査概報』
〃	3	1967	『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970	『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	1971	『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971	『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971	『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979	『蛍沢遺跡』
		1983	『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財			
〃		1983	『山野峠遺跡』
〃		1985	『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986	『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1987	『横内城跡発掘調査報告書』
〃		1988	『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書			
〃	第16集	1991	『山吹（1）遺跡発掘調査報告書』
〃	第17集	1992	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第18集	1993	『三内丸山（2）遺跡発掘調査概報』
〃	第19集	1993	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第20集	1993	『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃	第21集	1994	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第22集	1994	『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第23集	1994	『三内丸山（2）・小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第24集	1995	『横内遺跡・横内（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第25集	1995	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第26集	1995	『桜峯（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第27集	1996	『桜峯（1）遺跡発掘調査概報』
〃	第28集	1996	『三内丸山（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第29集	1996	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第30集	1996	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第31集	1997	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第32集	1997	『桜峯（1）遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第33集	1997	『新町野遺跡試掘調査報告書』
〃	第34集	1997	『葛野（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第35集	1997	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第36集	1998	『桜峯（1）遺跡発掘調査報告書』
〃	第37集	1998	『新町野遺跡発掘調査報告書』
〃	第38集	1998	『野木遺跡発掘調査報告書』
〃	第39集	1998	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第40集	1998	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
〃	第41集	1998	『野木遺跡発掘調査概報』
〃	第42集	1998	『熊沢遺跡発掘調査概報』
〃	第43集	1999	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第44集	1999	『葛野（2）遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第45集	1999	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
〃	第46集	1999	『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
〃	第47集	1999	『稲山遺跡発掘調査概報』
〃	第48集	2000	『熊沢遺跡発掘調査報告書』
〃	第49集	2000	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第50集	2000	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
〃	第51集	2000	『桜峯（1）・雲谷山吹（3）遺跡発掘調査報告書』
〃	第52集	2000	『大矢沢野田（1）遺跡調査報告書』
〃	第53集	2000	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第54集	2001	『新町野遺跡発掘調査報告書Ⅱ・野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第55集	2001	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
〃	第56集	2001	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
〃	第57集	2001	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅲ』
〃	第58集	2001	『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第59集	2001	『市内遺跡発掘調査報告書』

青森市埋蔵文化財調査報告書第59集

市内遺跡発掘調査報告書

発行年月日　平成13年3月31日

発　　行　　青森市教育委員会
〒030-8555　青森市中央一丁目22-5
TEL　017-734-1111

印　　刷　　東北印刷工業株式会社
〒030-0902　青森市合浦一丁目2-12
TEL　017-742-2221